都合よく行つてもまる二日待たねばならない。

この時、露語がかん能で、この現下のモスコウ事情によく通じ、又度胸の人並以上にすわつた馬場さんが居なかつたら、私は汽車に乗れなかつたであらう。

馬場さんと私とは強引に車室へ座りこんで、馬場さんからあとの切符を買ふべきルーブル貨を借りて談判をつづける。といつても私は露語は一と言もいへないのだから、これでいよ〳〵汽車が動き出して馬場さんは飛び下りてかへる。あとは何とかごたごたやつてゐる中に、車中の英語かフランス語の通じる人間でも引つ張つてきて、やがて話はつくであらう。

本當に正に汽車が動き出す瞬間である。ゲ、ペ、ウが切符を拾ひ上げて持つて來てくれた。日本の女の乘客は私一人しかないのでぢきわかつたのである。それにしても切符だから價いものでも出たのだよ、食べ物や品物なら十錢のものだつて戻つて來つこはないのだと馬場さんも喜んでくれた。

もう暗くなつてゐた。この二等室といふのはつまり一等室と殆んど同じで、只車の兩端の車掌室の隣りの上下二つしかないコムバアトがそれだから、婦人の一人旅にはこれが大低、相客なしの一人きりですむからいいと云ふ智慧を得てゐたのでこれを買つたら、案の通り、滿州里まで私一人で獨專できるらしい。隣室では先刻のぢいさんのボウイがごそごそやつてゐる。

さて夜更けてくるとこのぢぢいボウイと、それから三等の方からあやしき片言の佛語をあやつる男ともひとり若い風體のよくないよた物みたいな男とがやつてきてコムバアトの戸をたたいて、今夜一晩だけこのよた者氏が私の部屋の切符を買つた合客だといふ。

合客はないと云ふ言質と、それから婦人客と男客は同室させるわけがないのだから、談判に及ぶと、さういふ時は言語の不通がいい幸ひでわけがわからないふりをする。

私は先刻驛で、凍えない爲めの散歩をやつてゐた日本紳士の車室へ馳けつけた。こ

の紳士たちは武官で、歐洲見學に來て巴里に滯在中は面會はしなかつたが、共通の知人を持つてゐたので先刻言葉をかはしてから、何かの時にはお互ひによろしくとあいさつをしておいたら早速今夜應援の扉をたたく始末になつた。

私はこの部屋の隅で、一夜を明かさして下さいと頼みこんだ。若い方の武官はそれは怪しからん、それでは僕がそいつと今夜一しよにゐてやらうと寢卷の儘で出かけて行かれたら、暫くして笑ひながら歸つて來られた。

よた者はボウイにやつたはなぐすりだけ損をして、ふくれた顏で三等室へ戻つて行つたさうで、安心して戻つた私がすぐ中から鍵をかけて一人でゆつくりと寢た。

ちぢいボウイはあくる朝から、言葉の通じないこそ幸ひ、すつかり口をぬぐつて、何事もなかつたやうに、のろまづらもよくサアビスをしてくれる。彼と私と間に通じる言葉は只ひとつで『茶』。ゆうべの事件もちくりと一と言針をさしてやりたいが殘念乍ら言葉ができない。

一日二日の旅とか、南歐やスイスあたりの風光明びな汽車の旅だと、窓外の景色をながめることが多いけれど、何しろもう波蘭土國境から眞白な雪景色ばかりが續いて、この先きも又十幾日間もつづくのだから、二重窓の外を見てばかりもゐられないぞ。その上モスコウまでもさうであつたが、これからあとの景色も平凡平坦なところばかりがつづくのださうだ。

ウラル山脈といつても內地の山々のように見上るような山岳が、見えつかくれつするわけでもなく、只自然にいつの間にか上りになつて山脈を越え又知らぬ間に下つてしまふごくゆるいスロオプなので、雪の中ではなは更氣もつかずにしまふ。

停る驛々の立札の文字は例の露西亞文字で、羅馬字に似てその字の向きがあべこべみたやうになつたり、逆まにしたやうなヘンな文字であるから、ちつともわからない。

その上わからないのは字ばかりではない。この極東行の一、二等の通過客の殆ど全部の外國人はろくに露語の通じる人はひとりもゐなかつた。

日本人が六人、武官二人と私と、それから南米アマゾンの開拓者の上塚司さんの一行三名が南米から歐洲へ出て歸朝の途中にある。あと獨人の支那へ行く若い飛行家達の一行と、奉天の日本の會社へ行く獨人、上海へゆく伊太利亞人などで、この伊太利亞人だけが、二三度シベリア通過をした事があるのでやや用が足りる。ふしぎと英米人はゐなかつた。伊太利人の外は私と同じくいづれも只『茶』と『然り』『有難う』とを知つてゐるきりである。プロレタリア物でよんだのでは國際列車の車掌などには中々にインテリがゐるはづだが、この列車にはさうした人間が我が一、二等客の眼の前へ一度も現はれてこない。いづれも我が部屋付きの爺ボウイ並みで、相互は十幾日間言葉もろくに通じずに旅をしてゆくのだ。

然し用は實際のところ『茶』だけでたりるので、つまり車内で湯も水も出るし、食堂は何にもないのは天下の周知のことだから、各人は食物を持參してゐて、室内でまごつとをやる。不性なのは、持ち込んだパンとソーセージと林檎でもかじつてゐるのだ。その他に入るものはつまり、云ひつければふんだんに持つて來るお茶だけだ。

支那茶みたやうな茶で紅茶ではない。それがすなはちロシアの『茶』。

ボウイは列車共通ステイームの外に、補助に薪の暖爐を各車室の片隅で燃く、それから汽車が停ると金づちを持つて行つて、車臺の下へもぐり込んで、流す熱湯や便所のものがその儘凍つて棒になつてしまふのをたたきこはす。それからだんだん寒さがひどくなつて來て、車臺のスプリングがひんぴんと折れると、今度は列車乘務員總動員で直す。我がよくばりだがお人よしで大男のボウイはいつでもそのつよい肩の力が重用されて、車臺の下へもぐつて雪の中へはらばひ何か持上る役を仰せつかるらしい。

シベリア通過でいちばん緯度が高くなるのはたしかチタ附近で北緯六十度ぐらいだと思つた。

隣りの車室へ遊びにゆく時や、汽車が止つてちよつと雪の中へ下りて散歩する時などゆめ手袋なしで外側の戸や棒を握つてはならない。凍傷どころか手の皮が鐵の棒へ凍り付いてむけて了ふ。

千キロ米、二千キロ米大した變化のない曠野の雪景色、おもな驛の附近には五ヶ年計畫で出來た工場の建物などもちらりほらりと見えるが、あとは、トルストイの時代も、チエホフの旅行記ともあまりかはらない、ロシア農家がところどころ沿線に見えて、ロシア人特有の色がしろくて圓顔で團子鼻の農民たちが人のよさうな表情で雪の中にぽつりぽつり見かける。

子供や女たちは汽車がとまると集まつて來る。未開の國のどこでも同じやうに、乘客から何か貰ふのが愉しみなのだ。ごくまれに何か賣りたいものを抱へて立つてゐる事があるが、今は極度の物資不足と時期の關係で話にきいたやうに鷄だの卵子だの野菜などをひとつも賣りに來なかつた。だから途中ですこしは何か買へようなどと思つた旅人は悲鳴をあげてゐる。十幾日間野菜も果實もないと懷血病になりかゝる。

ある大きな河にちかい驛であつた。ドイツ人のひとりが此所はカビヤ——あの蝶鮫の卵のうまい鹽漬——の名產地で賣りに來るだらうと云ふので、乘客たちは愉しみに首を出してゐたが、雪のせいか統制が嚴重なのかカビヤのかの字も見られなかつた。

私は朝のパンと茶を食べると、バターは二重窓の間隙に、冷藏庫のやうにしまひ込む。たつた一人のコムパアトは大きな人種用に出來たものなので天井が高く、大きい荷物もみんな天井裏へ片付いでしまつて、小柄な身體には萬事が廣々とした住居である。但し前の大戰にできた古い國際列車だが。

本を讀んだり、窓の外をながめたりする。室內の溫度は快適にいつもおなじやうに上手に暖爐が燃かれてゐて、南歐にある心持とちよつともちがはない。あののろまの爺さんでも流石に暖火の燃しよう溫度の平均はうまいものである。まだ日本人のスチイームの通し方はこれはまた無類のカラヘタである。もつとも彼等は祖先傳來暖火で苦勞してゐる人間でもある。

晝や夜は持參のアルコールランプを持ち出して、巴里のおいしい鑵詰をあれやこれやとひとつづつ取り出して、それをちよつと加工し直して食べる。パンも大分固くなつたが、うまいパンだから、巴里のおこもも食べないやうになつたのを大事にかぢつてゐる。

時々は同車の日本人のところへアルコールランプと鑵詰を持つてゆつて先方のと合せて、お互ひの味覺の單調をやぶる工夫もする。

上塚さんの一行は伯林で誰かにたのんで準備した食品ださうで、ネーブルと、ハムとソーセージとパンだけを山のやうに持つて來たが、何とも味覺が單調である。故に私のたつた一つづつの小さな鑵詰の小鳥と松露のあへ物などの巴里料理が珍重される。又みんなで工夫して運よく手に入つた、驛で百姓がもつてゐた牛乳なんどでポッタアジュを鹽とこせうでこさへる。食堂はもう例の羊の骨付とジャが芋汁も骨なしのじやが芋ばかりになりかけてゐるさうだ。

車中で一番人ずれがしてそのかはり陽氣な上海にゐると云ふ伊太利亞男は、バイオリンを時々かきならす。中々おしやべりで面白い。彼の片言のロシア語が一、二等乘客全部の用を時々たしてくれることは前にいつたが、彼はブロークンでも佛、獨、英もわかるし、無論支那語もわかるだらうし大に重寶だ。

ドイッ人の若い飛行家の一群は英語がちつと通じるきり、私の仕事をアルチストと

聞いて、あとでは日獨一じよに大笑ひしたのだが、其のドイッ人が友達にあの日本女はあの小さな體で輕業ができるのかなと首をかしげたさうだ。

英佛の『藝術家』といふ言葉はドイッだと普通輕業師といふ意味に通じるのをついうつかり私も其時思ひ出さなかつた。

何しろ我々通過客の大部分はロシア文字はよめないし、ボウイとも話は通じないし、モスコウの時差さへ遠く離れるとだんだんはつきりしなくなる。嚴寒のシベリア通過は一週間も汽車が遲れることは珍らしくないのだから、覺悟の上の一同大して苦にもしないがもう一日や二日はおくれてゐる筈だ。

そのうち漸くバイカル湖沿岸まで來た。眞白な平野の雪ばかり見馴れた眼にはこの雪の中のうす黑い湖面に沿ふて走るのも枯芦なんぞが凍つた汀に見えるのも、單調をやぶつてシベリアの蕭湘たる天地のひとつの趣である。

湖岸の向ふには市街が見えて、久々で小さくとも丘の上に農村でない町らしい寺の

塔の姿なども見える。

滿州里へ着く二日ぐらい前から食堂車は取り去られてしまつたさうだ。

ある朝、役人が汽車へ乘り込んで使ひ殘りのルーブル紙幣を支那紙幣と强制的に交換させられた。ぽつちり殘つた露貨が支那貨で割合に澤山になつてかへつて來たと思つたら、その支那貨は渡されたものよりずつと低い通用價値しかないのはあとでわかつて苦笑した。露貨、支那貨（張學良政權時代）などと云ふものの本當の價といふものは甚だオカシナものらしい。

ひひと降りしきる雪の中で、漸くのことにある日の正午頃滿州里へついた。

汽車はやがて二時間ほどで當時の露支合辨の東支鐵道へ乘りかへられると聞いて一同感心したら、實はそつくりまる二日遲延して、丁度都合よく次回の發車にきつちり間にあつたのだが、シベリア鐵道の二月の旅としては大した雪の事故もなしで大出來な方だつた。

丁度その前の年の秋に張學良とソ聯と喧嘩をしたままで、露支交渉が片付かないので又波蘭土國境の汽車のおいてけぼりのやうな眼か、支那の事だからもつと厄介がありはしないかと乘客達が案じてゐたが案外にすらすらと行つた。

中でも我々日本人だけは此所からもう旅券の檢査などが要らなくなつて、この當時でさへも我が國威は此所まで及んでゐるのが二、三年外地にあつて、何をするにも自分の寫眞入りの旅券を取り出して見せねばならなかつた身にとつては、心强く嬉しい思ひがする。

この時滿州里には幾人位日本人が居たことやら、とも角まだハルビンから此の地方はうつかり日本人として入つて行くと生かしては歸さない地方が滿洲の奥地には多かつたのだが、この大雪に此所にたつた一人で駐在してゐられた某陸軍大尉が厚いロシア風な毛帽子に長外套で白い息を吐きながら雪の中を露支人と何か奔走してゐられる姿をみて、しみじみ御苦勞なことだなあと頭がさがつた。身邊には絶へずあぶないことが付きまとつてゐるのであらう。

北滿のゴムの木

滿州里で乘りかへて、まづ我々は食堂車へ馳け付けて久々にいろいろと御馳走を食べた。實はこの四五日みんなの顏色は懷血病とまでは行かなくとも運動不足と、巴里、ロンドン、伯林で仕込んだふるくなつた野菜と果實ばかりで顏色が大分紫色になつて來た。

何もかもおいしかつたが、不思議とパンだけはロシアの黑パンよりもおとる。眞白で體裁ばかりよくてもふのようなかみしめた味でまづかつた。久々で我々はパンを常食としない土地まで歸つて來たことに氣が付いた。

齋々哈爾も興安嶺の山々も何もかも吹雪の一色、ドイツの伯林から出くわした雪は

まだまだ何所までゆつたら眼から消えることであらう。一寸の土のいろも暫らく見ないことだ。

翌朝ハルビン驛頭の雪をふみわけ乍ら、横川沖の兩烈士と伊藤公のと、ふたつの日本のささげた血のあとを詣でた印象は、そのあとで滿洲國となつた驛頭で參拜した時よりもずつと心に深くうたれ胸にこたへたものがある。

ハルビン驛頭で、露西亞旅でめぐりあつた日本人一行は皆再會を期して「雪のあしたの別れ」をつげた。十幾日のアルコールランプの手料理をつつき乍らの雜談、そのうちでも南米アマゾン開拓の上塚司氏の熱辯は、雪の中で私にアマゾンの熱い未知の國土に常綠の無限林、鳥のやうに群れて飛ぶといふ多彩のあふむの羽根のいろが眼にうかぶ、漸く土地開拓權だけをブラジル政府からかち得たばかりで、未來の多難と上塚さんのやせた小柄の體から出さねばならぬ偉大な努力とをしきりと思つたものであつた。

その後の上塚さんの事業の苦難は想像以上であつたやうで、然しあのやせた上塚さ

んのガンバリは到々、たつた一と粒のジュートの種の成功から苦難をはねかへして、新聞にも近頃よくその事がでるように大アマゾンの開拓は華々しき大成功の途にすすみかけて來た。この時の緣で上司さんは今でも、アマゾン開拓の事業の印刷物を私に送つて下さるが、これも何とも嬉しいあとの話である。

さてアマゾン開拓の上塚さんの一行やモスクワの夜聲援して頂いた陸軍武官とわかれて私はハルビンの大阪毎日新聞支局を訪づれた。するとこの北の國にめづらしい、客間の眞中には美事な一本のゴムの木の大きな鉢植がある。久しぶりで見るその青いいろ、艶々とした大きな葉、暖ためられた室内の空氣に包まれて、瞬間私は通つて來た、雪ばかりの貧しきプロレタリアの國や北滿の吹雪を忘れて、又アマゾナスをちよつぴり思ひ出した。

一泊してハルビンを雪の中で見物して、いまの新京はまだ當時の長春であつた驛で南滿鐵道に乘りかへ、又更に奉天で乘りかへて朝鮮に入つてはじめて凍つたながらも水田の土を見ることができた。二月の半ばに巴里を發つたのが、もう今は三月の初め

で日本の西部では桃がきれいに咲いてゐるのが見られるなと、三年ぶりの三月の桃の花を思い出した。

其の後、世の中はすぐ滿洲事變となり滿洲建國となり、馬占山がチチハルで皇軍と戰つたり又歸順して大臣になつたり、更に又謀反をして我が軍に追ひまはされて、ハルビンの河向ふ、黑龍江省の森林を千里二千里うろ付いてゐる時になつた。私は大每から滿洲めぐりを云ひつかつて、滿洲の皇軍進駐の各地をあちこち廻つて又ハルビンへ來たのは秋の始めになつてゐた。

丁度ハルビンは何十年ぶりかの大洪水に見舞はれて、目拔きのキダイスカヤ街、帝政ロシアの豪華の夢をちよんぴり殘してゐたこの名殘りの街にも、松花江の水が支那人町の方からどんどん流れ込んで、建物の入口には皆土囊のバリケエドがつみ上げられて、辻々をボウトが往來してゐた。

一頭立の滿洲名物の馬車——あれは中々古風で趣きがあつて私はすきなので、あれ

に乘つてちやぶちやぶと久しぶりで、なじみの大每の支局を訪れると、住む支局長や社員はもうすでにかはつてゐるのに、變らないのはあのサロンのゴムの木であつた。

今はもう高い天井にもつかへて、幹も更に太くなり、枝や葉はサロンの中に王者のやうに茂つて、他の家具類は顏中におかないやうに威ばつてゐる。

大方この木は暖氣さへあれば、其の生れ故郷のやうな激しい明るい光線はなしでも立派に育つて行くものらしい。主人の度々かはる家の中で別に肥料やむづかしい手入などは與へられるわけでもあるまいに、ともかく北滿殖民のたくましきサムブルみたやうな賴もしきは此の南國生れのゴムの木ではある。

それから又更に數年、いよいよ大きくなつてとぐろを卷いて、北滿のゴムの木は雪の中で人々にいまでも青い葉色をたのしませてゐることであらうか。

蒙

疆

包頭のある宵

「こらつ車を下りろつ」

城外へ――京包線の蒙古の包頭の城外へ出ようとしたとたんどなられた。

見ると東の門なぞは場末のわびしい所だから、日本の兵隊さんは居まいと思つたら、まあこんな所にさへ、蒙古兵に交つて、たつた一人の我が日本兵がゐられる。

兵隊さんは人力車から下りた私の腕章、大阪毎日と大きく書いて、〇〇部隊第五〇三號と脇へ書き新聞班の大きなはんこが捺してあるのを見て安心して

「いや、御苦勞さんであります」

「いゝえ御たがひさまで、兵隊さんこそ御苦勞さま」

まだ、包頭の城内へは、日本の女なんぞがゐる筈がないし、やつとせいぜい綏遠現在の厚和までしか普通の、然も隨分に嚴重に制限された僅かの日本人が入りこんだばかりなのだから、一人でのこのこと人力車なんぞへ乘つた洋裝女が然も城外へと出てゆかうとしたのだから、一體どこの國の何者だと兵隊さんが怪しんだのも無理がない。

東の城門を出て清らかな流れをざぶ〳〵車ごと渡ると包頭第一勝の龍泉寺の見はらし丘がある。ながめがいゝので小公園になつてゐて、所々に買藥の廣告ベンチなんぞがある所もかういふ僻地だと文化的な匂ひで懷かしい。遠く初冬の光る大黃河を見渡した大きな景色だ。

左手の丘の下にはお寺の堂宇や、老樹をすかして清流をへだてゝ城壁がつゞく。

溪流の山手の方から砂ほこりを立てゝ蒙古兵が隊伍を揃へて城内へかへつてくる。日本の日の丸を色だけあべこべにしたやうな赤地に白日の丸を染め拔いた蒙古軍旗を先頭に押したてゝ、馬は少々蒙古馬だからちびでぱつとしないけれど、騎り方は生れた時からけだものの背中で育つた人間たちだから見事なものだ。かばかばかばかば

と行進してくる勇ましい行列をみると

「友軍蒙古軍、萬歲！」

とでもいひたくなる。その先頭に立つた將軍を見ると四五日前に面會した、包頭警備司令官の實中將だ。彼の擧手敬禮ぶりも中々堂々としてゐる。實中將を本式に蒙古語でよべばボイントル將軍！

この蒙古の軍兵はみんな、滿洲國あたりで調製して貰つた、我が軍のとよく似た、ハイカラな軍裝もなか〳〵身によくついてゐる。奧地蒙古で見るやうな辨髮を頭のてつ邊へぐる〳〵卷きにしたのだの、木綿の土民服そのまゝで、長い蒙古靴から長きせるを取りだしてすぱりすぱり吹かしてゐるやうな蒙古兵とはわけがちがふ。

このなか〳〵潑溂とした隊伍といひ、およそすべての蒙古軍兵今や大得意の時代なのだ。

これはずべて蒙古軍總司令官、李守信將軍麾下の精鋭だ。

さてその晩、李守信將軍の宴會が催されて、○○機關を通じて私も招待された。

四五日前に私は蒙古軍司令部を訪問して、――然も迂濶にも李守信將軍が現在こゝに屯することも知らずに出掛けていつて、偶然李守信將軍と參謀總長の烏古廷中將とに逢へて暫らくの間話をしてきた。尤も烏古廷中將の方はもつと前にさる所で顏を合はせたのだがその時は彼も李守信將軍拔擢の蒙古軍總參謀長とはいへ、まだ僅かに三十何歳の青年將校だから、私はたゞよく肥えた元氣さうな若いいゝ士官だなと思ひ、彼もまたおやこんなところになんで日本女がゐるのかと思つたくらゐのとこだつろたに違ひない。

今夜の宴會といふのは、てうど日本の代議士が五、六名皇軍慰問に此處までやつて來たのを機會に李守信將軍が蒙古軍の幕僚とともに、在包頭の皇軍の將校達や、軍屬の主だつた人達、蒙古自治政府側の日本人等々、あらゆる日本側を招待して一席の親睦の宴會となつた。

宴會の場所は包頭の町の中央、一番まづ目拔の繁華で大きな商店なぞがある通りの

一番大きな料亭、いはゆる飯莊で、總司令部のすぐ近くだ。

私達はすこしおめかしをして遲くなつて會場へ着いた。日が暮れてもう初冬の夜は凍つて氷り雨がすこし降つてゐる。町の後ろの陰山の向ふはもう雪であらう。

さてその私のめかしを諸君よ笑ふ勿れだ。私も同行の山岸多嘉子さんも――この勇かんなる若くなか〳〵に美しき女傑も丁度こゝの○○○⊙で働く弟氏を尋ねて包頭へやつて來て二三日ひとつところに枕をならべてゐるのだが、何しろこの女性兩名あまりにも汚なすぎて――それでもわれ〳〵ごときスゴイやうな女性でも、はゞかりながらなんと優しいところもあるもので――お風呂へ行つてちつとはキレイになつて行かうと相談したものです。

私の方はそれでもこれで北京以來たしか二度ぐらゐは入浴したかな――二十ばかりの間に――何しろ現在包頭のわれ〳〵の宿泊してゐるところにはお風呂なんぞはまだない。從つて入浴したくも出來ない。

中にはそこに働く人には、もう二ヶ月くらゐ入浴してゐない豪傑さへもある。それ

にもう寒いからとても室内でストーブがあらうと裸體になつて體をふくこともできないから、大分俺の體はもぞ〳〵するぞといふ人が澤山ゐる。

まさかまだ虱はわかさないが、私の首すぢは一夜防禦のユーカリ油をつけることを忘れて、南京蟲に十分食はれて、赤い首輪のつゞりのようにぐるりとぶつ〳〵になつてゐる。その上汚れの方は、毎日蒙古の砂ほこりにまぶされて、その上煙だらけのストーブの傍で暮してゐるのだから垢とほこりと煤で、タオルで首のまはりをそつと撫でただけでもタオルが眞黒になる始末だ。それほどになつてもいよ〳〵仕方がなくて支那の風呂屋へゆかうと奮發が出るまでには相當の時間がかゝるものです。

さういふ次第で、山岸女史も私も溜まりに溜まつたよごれをはがすので、たゞさへ長き女風呂、さらに長くて燈火がついて、最後のお客になつて風呂屋の番頭小僧が呆れはてた。

垢だけはやつとなくなつたが、めかしたりどいへども、この二人の女性の服裝はまた振つてゐる。

無論軍の旅の出先だから、二人とも長いこと、着のみ着のまゝ寢起きしてきた素晴らしい一張羅だ。ちよつと多分諸君も興味をもつだらうから描寫する。

山岸女史の方は、事變後天津で初めて髷を切り落し今はバアマネントでまつ毛はアメリカ女優のごとくぴんとさせて今夜はほゝ紅口紅眼鏡はかけてゐるがなか〳〵のシヤルムがあるが、體には戰爭をくゞつてきたよごれた軍屬の男服だ。皮のゲートルばきだ。私の方はいつもの乘馬ズボンは捨てゝ、今夜はスカアトにはなつたにせよ、よごれたセエタアに重ねたものは、東日大毎の慰問袋の中から出た男の毛糸のチョッキで、山岸さんといゝコンビの二人女性の恰好だ。

お料理屋の門前に劍付き鐵砲の蒙古兵が番をしてゐる。宴會のある一番奥の座敷の入口にも又劍付き鐵砲だ。

然しその後、綏遠で出くはした德王のある宴會では、部屋の中まで劍付き鐵砲がずらりと取りまいてゐた。もつともその時はある特異な寄り合ひだつた。

お客はもう一ぱいで四五十人もゐるかしら、日本人と蒙古人ばかりで無論一人の支那人もゐないのは當然だが、室内の空氣は非常に和氣あいあいとしてゐた。

そのくせ誰も彼もがさう勝手自由に、十分に話がかはせる譯でもない。此方の人を引つ張つて來て通譯をして貰つたり、向ふ側の人に返答を賴んだりといつた具合で話をしてゐるのだが、蒙古軍の方にも若い將校達には日本語の話せる人が澤山あるし、又今から一生懸命に日本語を覺えようとしてゐる人ばかりだし、日本側も蒙古工作をする○○○○は無論のこと、軍屬には通譯だつた人も澤山ゐるから、座中の蒙古語支那語も——厄介なことに現在の包頭綏遠あたりではこの二つの語が併用されてゐるので——、自由にゆける人が多いからさらに不便はない。第一その上日蒙兩方ともいま精神や行動がぴつたりと合つてゐるのだから、またわれ〳〵のやうに支那語も蒙古語もちつとも出來なくたつて心の方が先きへ打ち解けてゐるから、まつたくの味方同士同國人のやうな氣持である。

李守信將軍の傍には○○○○の横田さんがゐて私の話を李守信將軍に譯して下さ

る。氏は落ち附いたしつかりした痩せた人で、蒙古工作やまた他の方面工作の大事なひとだ。何度も生死の境を越えてゐる。たゞしそれは横田さんばかりではない、綏東事件やまだいろんなことで、蒙古軍と苦勞と生死をともにして來たり、その他、戰爭ばかりでなく生死の境を突破した人が澤山この座中にはゐる。

今夜は蒙古軍の連中も、さういふ特別工作に働く人達も、また堂々と蒙古軍を援ける皇軍の將校も、いつか支那人にとられてしまつて恨みかさなる包頭綏遠の失地回復を蒙古人にさせてわが世を喜ぶ宴會となつたのだから、誰だつて嬉しい。

ところで皆にいち〳〵挨拶をしてゐる李守信將軍の態度といひ風格といひなか〳〵に立派だ。

脊がなか〳〵高くて立派な體つきだが、肥えてはゐない。顏は味のある温容で、落ち附いた柔和でしつかりした眼附きをふだんはしてゐて、靜かに、然しはつきりとした話しをするのは頭のいゝ證據だ。

人品も、その過ぎ越し方に考へて、感心するほど賴もしげで品があり、日本の將官

にしても恥かしからぬほどだ。氣持ちのいゝことには軍人らしく慾のない人相である。支那人の老將軍ならたとへどんな人にせよ、必ず、ある慾、ことに物質慾の影があるのだが――そこで日本人と蒙古人と氣性が似てゐるのだらう。

宴會がはじまつた。

眞ん中の圓卓の正面には議員の長老株二、三人を据ゑて、日本軍の將校、その前へ李守信將軍が座つて脇に通譯をする副官の郝上尉（大尉）がゐる。旅順の工學堂出身ださうで日本語が大へんうまい。熱情もあり眞面目ないゝ若い副官だ。

副官を間にはさんで私、李守信將軍は世なれて人間をよく見るから、大方先日私に逢つてみて、お饒舌でこだはりがなささうだから隣へ持つて來たのだらう。席には女士と書かずに長谷川先生とあるにはやれ〳〵だ。

李守信將軍のあいさつは、靜かにしかしはつきりとした口吻で、大へん叮重な日本への感謝の言葉と將來への援助の希望をといつたものだつた。通譯は郝副官が正しく

はつきり譯したやうである。

このあいさつは支那語だつた。綏遠の宴會では德王はふだんは支那語でしやべるが、演說の（卓上）時は蒙古語でやつて、わざ〳〵支那語に譯させた。

その時分そろ〳〵次ぎに控へてゐた包頭美人達が五六人しやなしやな現れて來てお酌を初める。

大きな圓卓は三つに別れて、右隣の卓は主人が參謀長の烏古廷中將で、山岸女史の白い顏紅い口元がその卓中に見える。

も一つの左の卓の方には賓中將と、もひとりの中將、烏、賓兩氏よりはもすこし年配の劉繼廣中將がゐる。第一師の師長だ。

答禮に代議士某氏が立上つて、一席のべ出したが、どうしたものか、氏はあんまり毎日皇軍慰問ばかりやつてゐるので蒙古軍の招待なのを忘れてまつたのか、初めちよつとひやひやしたくらゐ日本の政策のことばかりを演說みたいに、おつかない顏をしてしやべるので「はてなあ」と思つてゐるうちに、だん〳〵とそれでも招宴に答へる

らしい言葉がお終ひごろちよつぴり附いた。

郝大尉の通譯を聞くと大分短かくなつて半分にも足りないやうだから、幸ひにして初めのむづかしいあいさつでない演說は恐らく蒙古軍でわかつたものは烏古廷中將だけだつたらう。彼は日本留學の蒙軍第一のインテリだから。

さて酒間の美人たちは、これが包頭より拔きの美人たちと推せられる。

一たい北方の娘たちは、色白でみなむつちりとしてゐる。日本の北の國の娘たちと同じことだ。

江南の彼の蘇州あたりの楚々としたすらりと仇つぽい美人の型とは反對だ。愛嬌も口數も少く、無論、だから江南の妓のやうに手くだなんぞも持ち合せてはゐさうもないけれども、またその素人娘くさいむつちりとして無口のところに浮氣がなくつて、眞實でいゝさうで、たゞしこれは支那通の某氏からの聞きかじりだ。

なるほどこの妓たちを見てもその通りだ。北京でみた南班の女とは違ふ。一體北京

の前門外（正陽門外の遊び場）でも北班と南班とちやんと店の前に看板でことわつてあつた。北班といふのが北方美人のゐる店だ。

北班のある店先には別の新しい札に「綏遠新來何々妓」と書き出してあつたくらゐだから、多分この綏遠や包頭は北方美人の產地なのかも知れない。昔の晉の國——山西省はついこの省のお隣だが、むかしから王昭君なんぞが產れて、美人の產地で知られてゐる。王昭君も美しかつたが、やつぱり北班で、無口で愛想が下手だつたからあんなはめで胡國——今の綏遠と包頭の間に王昭君のお墓がある——のつまり蒙古の王樣へやられる身となつたのだらう。

閑話はさておいて、まつたく今夜のこの美人たちも江南の妓女のやうには嬌態もなければあいそもない。全く素人くさい。年は十七八からひとり二十三四かと思ふ姐さんもゐて、みんな戰爭のあとのせゐか身なりも大變ぢみだ。お化粧も極くうすい。

面白いことに姐さん株の妓は絹の靑黑い服の上へ——毛糸の袖なしセエタアを一着に及んでゐる。此の僻遠の土地では、毛糸製品は大へんハイカラな新衣裳の一つなの

であらう。

李守信將軍は非常に座を取り持つこころで機嫌よく酒を盛んに乾杯する。よく話す、通譯の郝さんがなか〳〵上手だからちつとも差し支へない。私もよく饒舌つた。座中はだんだんとりとめもない長閑な話になつてゆく。

然し、みんな氣焰も相當上げる、李守信將軍だつて、まして郝副官は若いから蒙古の明日のことになると山のやうな希望と夢を持つてゐる。

主客の代議士諸君はあのシカツメらしい演說のあとは案外處女のごとく柄にも似合はずあんまり談論風發ではない。察するところ、日本人以外になると相當エライ人でもよく無口になつたりはにかむ質の人があるものだ。まさかさういふ人みしりをする御連中ではないだらうけれども蒙疆に委しい人がゐないのであらう。

日本の將校、軍屬は無論大機嫌だ。

さて卓上の御馳走は戰地としてはせい一ぱいの御馳走だらう。黃河の上流鯉のとり立ては包頭自慢の名物だ。大黃河は山西陝西を北上して忽然と、この砂の蒙古包頭市

のつい半里ほどの鼻の先きへ現れて洋々と泥水を流してゐるのだ。大黃河の鯉は金鱗に光つてゐる。

また果物のまつたくない蒙古に珍しい生の葡萄の幾房もあつた。伊梨あたりからでも隊商がはるばるともたらしたものかな。伊梨といふのは新疆省もずつとずつとはづれの、ロシヤ領のブリヤト蒙古と呼ぶ部分の葡萄の名產地で、伊梨の干葡萄といへば有名なものだ。アメリカのより味がしまつてうまい。包頭では店頭ではるか奧地の中央アジアの品ものに時々でくはすのである。

今度は參謀長の烏古廷中將が私の隣へやつて來た。

李守信將軍は通譯の郝副官を連れて、順々に他の卓の人と交驩しに廻つてゆくのだ。

李守信將軍はつとめて、よく飲んだが、烏古廷中將の方は本當の酒飲で又馬鹿に酒强いので日本人仲間でも有名だ。體も「牛の烏古廷」と仇名があるくらゐにお相撲さんのやうに肥つて大きい。

徳王も肥つてもゐるし、相當の大男だが、烏古廷中將の肥り方はそれ以上だ。赭い血色のいゝ元氣な顏で先日は鼻のあたまへおできを乘つけてゐた。

「烏さん、おでき直りましたね」

とまづわれ〳〵二人は朗かに笑つた。

新しい料理の皿が出てくるたびに、まづ乾杯々々と酒を干す。何だ彼だといつてはまた乾杯で、卓中の一同が杯を空にしてはお猪口の底を客同士見せあふのだ。

大酒飲みの烏古廷中將は、體にくらべてひどく小さく見える杯を「乾杯！」といつてはぐいぐいと飲んで、赤い顏、赤い眼をして座中を見まはす。これは誰もとても敵はない。

饒舌る方なら誰にだつて負けはしないが、この乾杯にはまゐつて、私はなるべく日本流にちび〳〵と杯をなめてごまかす。

蒙古軍の將校たちは大ていその胸に、成吉汗の肖像のマアクを附けてゐる。また李守信將軍や高級の幕僚は蒙古勳章をつけてゐる。

たゞし李守信將軍だけは日本の勳三等と滿洲國の勳三位で、私に呉れた名刺にもちやんと肩書きに附いてゐた。

蒙古人の夢は、蒙古軍の希望は、明日にもまた內外蒙古はおろかなこと、西へ〳〵と前進してむかしの大蒙古再現を夢想して、また出來るだけそれを實行しようと思はない人はない。

その上、日本といふ有り難い後援者が、しかも支那人とはまるで違ふ、生來正直で無慾で戰爭につよいといふ甚だウマの合ふ、エライ控へ力士が出來たのだから、支那もロシャも何でも蹴ちらさうといふその意氣組たるや、まして今夜は上機嫌で醉つてゐるのだから素晴らしい氣焰なのは當り前。

烏古廷中將と私は杯を合せた。二人とも大樂天家だから大へんな約束をした、今度逢ふ時は內蒙古なんぞぢやなくつて中央アジャの眞中あたりの大高原で乾杯しようぢやないかといふことになつた。

「僕はぢやあ、ひとつペルシャ邊りから船で廻つて君達と落ちあはうか」

にこにこ笑つて、さういつたのは蒙古自治政府で働く日本人の某氏。

傍へよりそつた姐さん美人に烏古廷中將が何か歌へといふと、胡弓彈きの男を呼び入れた。烏古廷中將はあんな爺いの胡弓なんぞいらんお前ひとりで唄へと散々押し問答のあげ句、とう〳〵妓は胡弓なしで、すこし低い聲で座つたまゝ唄つた。

すこし寂しい歌だ。何か宋あたりの歌で、王位をつぐ皇弟が慰めに唄つた詩か何かだつた。無論この妓は支那人だつたが、何もこんなあまり陽氣でもない歌を故意に唄つたわけでもない。さう聞けば先年滿洲の平康里——花街——でもこの歌をきいたことがあつたつけ。

それにしても、もう北京の例の南班の江南美人たちは話の方はやつと片言まじりに二た言三言いへるかいへないほどなのに「ああそれなのにそれなのに」とやり出すのに比べて何と何と北班式はぢみなことよだ。

やがてまた烏古廷中將が隣の卓へ動いて、寶さんと劉さんの二將がやつて來る。

劉中將は私は初めてだ、二人とも言葉は通じないし、みんな酔つぱらつてもう通譯

も何もなくなつちまつたから、筆談だ。劉將軍、ひどい佛信者で酒はのまない。萬年筆を取り上げて何を書くのかと思つたら

「東方奇才女士來——、——、之亦三世奇遇緣」

眞中の女句はもう私も酔つてゐたから忘れてしまつた。

やがて元の座へ戻つた、李守信將軍もすつかり酔つてゐた。但し酔態は出さない。この長時間の宴會、すゐぶんみんな酔つてしまつたが、ひとりも酔態を出す人も、まして酒癖の狂態がないのはさすがみあげたものだつた。

李守信將軍が紙へサインをした、もう酔つた手つき、酔つた字だつた。

ろくに飲めもしない酒を、いくらなめて胡麻かしても、長い時間なん度乾杯をやつたかしれないのだから、座敷のそとへ出ると急に私はふら〳〵し初めた。

出口でごちや〳〵してゐるうちに、一しよに歸る人達を待ちきれなくなつて、つめたい細い雪と雨に顏を打たせて歩き出したものゝ宿まで歩けずに、兵站の日本歩哨の姿をみると、たまらなくなつて兵站へ轉げ込んで、暫くねかして休ませて貰つて、兵

隊さんから風邪藥を貰つた。かういふ所へ來ると、人なつかしさはお互で、日本人であるといふことは、日本の親子兄弟の間柄のやうなものだ。

山岸さん達は、先へ歸つて心配してゐたらしく、右の始末で、夜ふけに一人でひよこりと歸つて來た私は皆にひやかされて、私の醉つぱらつて兵站へ轉げ込んだ笑話は、あとから包頭へ來た文士の某氏や山岸女史の乾杯のタネにされたさうだ。

翌朝、また包頭の驛頭で烏古廷中將と都副官にあつた。

汽車の中には代議士諸君もゐた。みんな四等車といふ、貨車の四隅へ腰掛を附けただけの車輛へ乘つて旅行をするのである。

汽車が出る時、烏古廷中將と私はも一度握手をした。そして又くり返した。

「このつぎには中央アジヤで逢ひませう！」

生きた敵兵に出くはした時

今度の事變の初めの頃、北支の戰線行で私は生きた敵の將校とそれから敵の兵隊たち數名にいきなり思ひもかけず出くはしたことがある。

僅か一、二尺のへだたりでお互に顏をつき合はせてしまつたのである。

突然かう書くと讀者は吃驚されてそりや一體本當のことかと疑はれるであらうし、第一私が今かうやつて無事に內地にゐて、敵の手中におちもせず、將介石の所へ護送もされてゐないのだし、さてまたおしやべりの私が今までかつて敵を生捕りにしたと大いに吹ちようしたこともないのだから、そりや夢ではないかといはれさうだが、事實は嚴然たる事實だ。

しかしそれほどに、敵將や兵隊と鼻をつき合はせながら、双方とも生捕りも討死もせずに終つてしまつたかといふわけは段々よんで行かれれば成ほどとなる。

最前線の兵隊さんで、いよ〳〵壯烈な白兵戰となつて敵の中へ突つ込んで行つて、敵とわたり合ふ人達でない限り、生きた敵の正規兵に出くはすことはなか〳〵できない。

もつとも降參して兵隊さんの臨時使用人になりすましたにい的ならばどこでも澤山ゐる。

儛(ぶん)の支那語の儛にやを附けて、「儛的」といふ新語が日本流のアクセントで日本人間に製造されてゐて、支那の敗殘歸順兵も一般の雇人でもみんなにいやにいやで我も彼も通用してゐる。

便衣の密偵の正規兵、これはうんと我々と身近くゐるには違ひないけれど、我々にはちよつとはわかり樣がないが、たゞ一度私の乘つてゐる汽車の中へ便衣の密偵が三名捕はれて乘せられた。若い男と老爺が二人、若い方はまがふべくもない敵の將校でまだ卅歳前だつた。本當に蒼白といふ顏の色になつてゐたが、さすがにもう觀念して

落ち付き切つた態度でわが兵隊さんの一ばいに腰を掛けてゐる車中の眞中に立たされて、手を縛れたまゝぢろり〳〵と車内を見廻してゐた。

あとの二人の爺さんの方は、それこそ僅かの錢でもめあてに手先きに使はれてでもゐたらしくたとへ縛られても、まだ神經にそんなにピンと來ないのか、別に顏の色もかはらず、たゞさすがに如何にも情なさうな樣子で、もし何か遺りでもしたら謝々とすぐ笑ひ顏で答へさうな呑氣な爺さんたちだつた。

北支各方面を歩いてゐるうち生きた敵を身邊にみたのは、外にはこんなものきりである。

さて一ばん初めの話にかへつて、京綏線の××で新蒙彊の立役者○○に面會する約束が、その日になつて内地から要職の人がその地を通過するので、何かと忙しいから、明日ゆつくり來てほしいと返事で軍旅一日のヒマが出來た。

かういふ時には他の戰線ならまづ直ぐ野戰病院の傷兵のお見舞にでも行きたいのであるが、山西チヤハル方面の激戰に引きかへてその先きの蒙彊ではかへつて敵があつ

さり逃げ出してしまつたので、わが軍の損害は輕微でこゝには傷病兵はをらない。そこで文化施設の方の視察を考へた。

わが共同事業として回教徒の小學校が出來て昨日その開校式があつて、回民の子供たちが一生懸命で覺えた「君が代」を唄つたさうであるが、今日はそこもお休みで、そのほかには、外人側ではキリスト教が新舊兩派大努力をつくしてゐて、カトリック教の方は殊に十分な施設で孤兒院や小學校や病院まであるといふ話で一つそこを參觀しては如何かとすゝめられて、例の洋車で出掛けて見た。

この地方の異教徒同土の喧嘩はいざとなれば虐殺ぐらゐは朝飯前なのだから、入口は嚴重な壁で固められて門もがつちり小さいけれど、中に入ると廣々としてゐて、天主堂（本堂）も東京にあるぐらゐの、東洋にあるものとしてはこんな胡地にしてはなか〳〵立派なものだつた。あとで知つたのだが、此所が中心で末寺がすでに附近の地方に四十餘ヶ寺もあつてちやんと教區まで極められてあるのださうだ。

しかし、現在はいろ〳〵な事變の影響からか森閑としてゐて、脇の僧侶館の大きな

建物にも數名のベルギー人の坊さんしかゐなかつた。戰爭以來何にも出來ないので、坊さん退屈してゐたのであらう、まあ上つて行きなさいといつて奥へ通されて寺内お手製の葡萄酒を出してくれていろんな四方山話をした。歐洲の山奥のお寺ではみな僧侶手づくりの銘酒があつて、あの市場で有名なシャルトルウズその他もみなそれだ。こゝのは坊さんがほんの自用にしてゐるぐらゐのところらしいが、久しぶりの口にはボルドウの酒ぐらゐの味がした。

そのまた主僧の顔が印象派の巨匠マネー筆の名畫「ボンボック」の酒飲の男そつくりで圓顔のにこにこした主僧は平服には羅沙製の支那服を着用して、机上をみるともう早速、皇軍や日本人とつきあふために、手まはしのいゝことで、日英支對譯のロンドン版の日常會話が取りよせてある。支那語と支那の文字はよくわかるが、まるつきり違ふ日本風の發音には坊さんたまげて唸つてゐる。

西洋人の坊さんは一度派遣されるともう其所で死んで骨をうづめる氣で短かい人で十年廿年、千八百年代から來てゐる老僧も此所に二三人ゐる。一番ふるい八十餘歳の

老僧は看護婦を兼ねてゐる數十人の宗道女（尼）をひきゐて別の病院にゐるさうだ。

「ボンボック」の主僧が案内して先に立つて行くと本堂の後には孤兒が澤山住んでゐた。孤兒は捨てられたのもあるし貧民の支那人が育てられなくて持ち込んだのもある。いづれも無論しなびた支那の赤ん坊だが、蒙古人の方にはキリスト敎はまだちんぷんかんだと見えて、蒙古の赤ん坊の持ち込みはない。

この少し大きくなつた唐子たちが、同じ着物で、一ヶ所に集められて大きな聲でキリスト舊敎の唄を唱和したり、敎義の暗誦をしてゐる。もすこし大きいのは授産場で仕事をしてゐる。其の中からしつかりした乙女や青年になつた孤兒たちは僧になり敎員になり保姆になつて立ち働いてゐるのもある。皆昔はあのしなびた榮養不良の赤ん坊であつたのであらうが支那人には珍しくきびきびと育ち上る。これから日本人側も片腕にしようと思ふ彼等の訓練には大いに意を用ひることだ。

哀れな支那のしなびた赤ん坊のために、少々ばかりの乳代をさし出すと、坊さんは大そう喜んで是非離れてゐるが病院の經營も參觀してくれ、例の千八百七十何年にこ

の町に來たきりの老僧や宗道女にも逢つてみろとすゝめるので、門前で寢てしまつた車夫に坊さんの流暢な支那語で行く先きを寢ぼけた耳によく云ひきかせて貰つて病院へ廻つた。

行つて見ればこれも胡地のことで砂つぼくなつてゐるけど規模はわが北京の同仁病院ぐらゐには大體出來てゐる。自家發電で、附屬の邸宅も禮拜堂も尼僧院も完備してゐる。

これもベルギー人の院長の邸をたづねて例の千八百七十年來の老僧に電話を掛けて貰つたが病室の入口で私を待つて居てくれたのはその老僧ではなく主任看護婦の尼さんだつた。老僧は婦人客と聞いて敬遠されたのかも知れない。尼さんも自國の言葉でしやべれる婦人客を喜んだのか、珍しいのか細々と話して案内をしてくれる。

女と男の病室は左右に區別されて、自費だの施療だの患者も相當ゐる。此所の外にはこれぞといふ醫者も土地にゐないのでわが軍の囑託か何かの若い細君がひとり淋しさうに入院してゐた、病氣は風邪のこじれた氣管支炎ぐらゐらしいが、夫君が附きそ

つてゐるとはいへ言葉の通じない碧い眼の人と支那人ばかりの中で心細さうだ。院長の苦笑話によると、支那人の醫者がゐたのださうだが、皇軍が進駐したら眞先きに逃亡してしまつたさうだ。

設備の方も入院患者の方も自費も施療もおかまひなく尼さんは——そこは少々長くゐて支那式な神經になつてゐて——片つぱしから開けて見せてくれる。

男の患者の戸もどんどん開けて見せる。我が同邦も歐米人も一人もゐなくて支那人の男ばかり、下級の室の中の最後の方は外科になつてゐて尼さん戸を開けてずんずん室内へ入るから私もついて入つて見廻すと、相當廣い下級の病室で大怪我をした若い男ばかり、手や足のないのや大分癒りかけたのが五六名ゐる。

ふと氣がつけばこれは敵の負傷兵ばかりだ。呑氣な尼さんも通してしまつてから今更私が日本人で敵の兵隊は傅作義の兵隊なのに氣がついたらしいが、落ついたもので何しろ足がないのやかういふ重傷ばかりだし自分で費用を拂つてゐるのだから入院させてゐるといひ譯らしく云つた。傷兵たちも突然の參觀人がよく見ると日本の女性な

のだから、甚だドン感な連ながらも、段々考へてみるとヘンな譯で、私が順々にベットのはしを見廻つて行くと、彼等の顏がコハばり切つて來る。双方さすがに無言であつた。もしこつちが若い男一人で、向ふに元氣な奴がゐたら、尼さんをほつたらかしてドタンバタンぐらゐ或ははじまつたかもしれない。

室を出た時はちよつとヘンな氣持ちだつた。しかし尼さんは續いて隣りの室を開ける、ちつともためらはずに。前室と同じ大きさの部屋だがやゝ上等で、ベットにはただ一人の若い青ざめた男が横たはつてゐて、若い下僕らしいのが甲斐々々しく附添つて立ち働いてゐる。

尼さんの說明は、これはこの土地の商人でちよつと怪我をしてと說明してくれたが、前室の空氣ですぐにこりや敵の將校だとわかつた。片足がないらしい。顏もインテリで支那町人の顏ではなく誰が見ても軍官學校出らしく引きしまつてゐる。向ふもさすがにすぐピンと來た。しわがれた力の弱い聲で尼さんにいきなりこの婦人は何國人かとたづねた。たゞの町人の患者なら默つてゐるわけである。枕頭にピストル

でもあれば握りかねない、彼にも戰線を廻つて來た人間のニホヒはたとへ私が女にせよすぐ解つたのであらう。

平和な尼さんの答へは然ししづかにほかにそらされたが、弱い氣力を絞つてなほ繰りかへして執拗に男は問ひせまる。答へによつては起きられない體でも、飛び上るかも知れない。何か自分の上に惡い事を豫想したのかも知れない。

下僕の方は無論彼の若い便衣の從卒なのだが、これが日本人なら御主人の仇とニラみ付けでもするところなのだが、悲しいかな主人の敏感が家來のはうへは通じない。

私は尼さんにフランス語で興奮させては慈悲がないから、何にもいはないようにいつたが、尼さんはただ支那語で見當ちがひの會話ばかりしてゐたらしい。室を出る時に、彼はたゞ、じつと見て、我々は顏を見合せた。十分間くらゐも彼の枕頭にゐたであらうか。今でも私はその肢のない男の顏をおぼえてゐる。

雪の中の日の丸

冬陽のさす厚和（綏遠）を出た時には大きなトラックの中に陸軍〇〇機關の山岸氏と私と半島青年の運轉手とのたつた三人ぎりであつたのが、百靈廟の先きで或る用事をすました歸途、もう此の陰山々脈の峠さへ越せば厚和であると云ふところの、陰山の向ふ側の麓にある最後の支那侵入の城市、武川縣城までたどり着いた時には人間の數がトラックにあふれる程の賑やかな日蒙合併の一行になつてゐた。

人烟キハクな雪におほはれた數百キロの草原行であり乍ら、丁度雪達磨が轉がつて大きくなるやうに途中のいろいろの事件でだんだん人數が增大して、然も其の乘つてゐるトラックさへ往きの車は、百靈廟の先きの小川の中に氷詰めに葬つて此の身がは

りは其の時いよいよ遭難かと覺悟した時に、天の助け、偶然他方面から入つてこれも天候不良のおかけでかへつて我々がめぐり逢はす事の出來た〇〇軍〇〇班の一行のたつた二臺きりのその一つといふ貴き借用車なのである。

此の武川縣城にはたつた二人同胞日本人が政治指導員として居る。まだ電信も電話も通じず自動車も持たない此町からはあの大陰山の四十キロ位の山越しをしなければ厚和と連絡が取れない、周圍には兵匪はうぢやうぢやまだまだ危險な此町で一人の他の味方もなく仕事をしてゐる此の若い人達に心から頭が下がる。我々が立寄つたずつと後の事一時此地は馬占山軍に占據されたくらゐである。其の時此の人達は果して無事であつたかどうか。

さて我々三人の無事な顏を見ると、指導員の小野氏は非常に喜こんで、實は貴方がたの歸りがあまり遲いので昨日捜索の蒙兵を二名百靈廟方面へ出した所だ、此の二三日盛んに近邊に敗殘兵が出沒する報告が來るので、やられたのかなと心配してゐた所だ、まあまあと進められて、早朝出發以來零下廿度の雪の進軍に初めて皆火の傍へ寄

ることが出來る。それから心づくしの暖かい食べ物火酒まで出ての御馳走だ。往きにも降雪の山越しでへとへとになつた三人が此町でもてなされて、偶然にあつたガソリン二罐を貰ひうけ、護衛の蒙古兵まで數名借用して前進していつたのである。

此の借用の蒙古兵が何にもならないやうでさて中々役に立つた。彼等は山のあなたの厚和や包頭で德王や李守信の麾下に居る、あのちよつと日本兵とさへ遠見には見まがふやうな颯爽たる蒙古兵ではない。あはてると敗殘匪と間違つて討伐されさうな、蒙古土民其の儘の服に古風な鐵砲を背負つてのそりとしてゐる先生たちだが、李守信が云つたやうに蒙古人は馬に乘ることゝ戰爭をする事の好きな血も體に殘つてゐるらしいとこもある。

汚れたぶち犬の毛か何ぞの總裏の木綿の長外套に辨髪を頭へぐるぐると卷き付けて、長靴の隙間には長煙管が入つてゐて、自動車が結氷を割つて水の中へおち込むと、先づ平然と岸の雪の上へ外套をぬいで擴げてあぐらをかいて一服やる。力は體も大きいし中々強いから起重機のかはりに肩を度々使用しても支那人のやうにべちやく

ちや、愚痴も云はない。又半日一日雪と氷ばかりで火の氣がなからうが、日本人のやうに先づ焚火をしようともしない、尤も雪原では燃すべき物一つも見當らない。夜は番兵に立てておくといつの間にか家の中へ入つて阿片をすつて寢こんでゐた。氣はいい、たとへ友軍にせよ支那兵の護衛より安心だ。まづかういつた賴もしげなる兵である。

かう云ふ護衛で、後から考へれば雪や氷の遭難ばかりでなく、ひやりとするやうな中をよくどうやら無事往復したものだが、それを思ふとたとへ迫擊砲や機關銃が飛んで來ようと、手榴彈でも投げられさうな所にせよ、皇軍の兵隊さんと一しよに居る時は、どんな前線でも何と心強い事よと思つた。廢きよと同樣の百靈廟で、いよいよ歸の車を御陀佛にしてしまつた時、見兼ねて送る事を申出られた〇〇軍〇〇班は心配して皇軍將兵數名までも一しよに付けて下さつたのでかへりには途中泊る時でも、例の寢てしまふ番兵でも安眠ができたものだ。

さて見廻すと小野氏の他のも一人の政治指導員が今日は見えない。聞くと今朝厚和

に公務の爲めこれも蒙古兵を連れて、雪の峠を越えてゐる頃だが途中必ず出逢ふであらうから自動車へ乘せてくれとの事だつた。若いまだ少年と云ひたい其の人は、日本から來たばかりの我々に取つては黃塵のあがる物わびしき胡地の厚和でも、どんなに武川にゐれば大都會に感じられるのか、兒童が遠足にゆく前の晩のやうに昨夜は嬉しがつて枕もとへ昨日入用の品ものをならべてゐたさうだ。

此所から厚和まで山越しの立派な道路と電柱が一度はあつたものらしいが、木の枝のついた曲がつたその電信柱はとつくに線がなくなり、道は山の出水で半分は消えうせて、又原始道路、卽ち川の水源をのぼつてゆく。それが二三尺の積雪の下の礫大石に砂、流水なのであるから、自動車の山登りは推しても知り王へで、時々、運轉する兵とお情けで女の私の外は、全員山岸氏と皇軍將兵以下蒙古兵に蒙古の王樣親子まで自動車を下りてゐんやらやの後押しをやるのだ。

さて逢ふべき其の少年の姿を探し探し、向ふからやつてくる雪の駱駝曳きに聞き聞きして、とある山影をまがると、白皚々の大陰山の峰に日の丸の旗をひらめかして、

日本少年は軍裝りりしく馬にまたがり部下の蒙古の將兵數名をひきつれて進んでゆく
雄々しくも繪畫的な姿を發見した。

旅雜記

飛ぶ空の三趣

滿洲建國のとしの晩夏、つまり滿洲事變の第二年のことで、あの馬占山が黑龍江省の果しのない密林を逃げまはり、最後に死んだふりをして露領へ逃げ込んだり、松花江、牡丹江に何十年目の洪水が出て、哈爾濱のキタイスカヤ街を舟で通行した夏の事であつた。

今は吉林から朝鮮の淸津方面へ出る鐵道線路がやつと吉林から八十二哩ほどの敦化と云ふ所までしか通じてゐなくて、そして其の間に敵兵、紅槍會匪がうぢやうぢや集結して、線路は壞す、橋といふ橋はみな燒き落す——私は初めて單線の汽車が木橋をかたごとやるのを此所で見た——吉林敦化八十二哩間の我が兵は連絡がなくて離れ島

のやうになつて警備をしてゐた。今は例の大日向村の分村のあるあたりなんぞは敵の根據地であつた。

さういふ情況の中にも敦化から朝鮮へかけても、又、大日向分村の方からハルビンへ出る線路も、皇軍にまもられて滿鐵社員は生命がけの測量から線路の建設をやつてゐた。

然しかう連絡を敵に絶たれてしまふと、飛行機で行けるのは敦化ばかりであつた。その敦化の飛行場たるや水はけの惡い土で、滿洲へ行かれた人は知つてゐられるあの雨となると深田の鋤きかへしたやうになつて、人間の歩くことは無論の事、馬の長い足さへ難儀する始末だから、飛行機は無論數日も止まつてしまふ。

私が吉林へ着いた時には、軍の人、滿鐵の人、普通人、飛行機を待つて、宿屋はえらい人達も一室に數人づつあつまつて、空ばかりながめてゐる所だつた。

まあ私の乘れる番までには早くて十日ぐらゐ待たされさうである。そこで私は大毎の中保氏を同行に語らつて、何とか工夫して行つてみようと乘れる所は汽車でもトロ

ッコでも乘り、あとは歩く事にして翌日敦化の方角へ向つて出發した。

虎がよく出沒すると云ふ老爺嶺と云ふ山の附近の驛では到頭丸二日連絡が無くて、出る事も引く事もできず、驛の警備の兵隊さんの所に居候をしてしまつた。附近の敵匪に追はれて逃げて來る土民の一群がどうせ掠奪されるのだからと牛を賣りに來たので、八拾圓の云ひ價を肉にして金三圓だけ買つてみたら、老牛で固くてかぢれなかつたのも話しの種、其の晩は赤砂糖をお湯でといてお汁粉のつもりで皆が飲み佐度おけさの競唱をやつた。

然しコースはまだ漸く三分の一、空をみると我が軍の○○機が飛んでゐる。此邊は原始と思はれる密林に蓋はれた山が大部分で、その峽が小さな川や濕地で、秋草などが咲きところどころに土民の部落があると云つたぐあひ、今ごろは大部水田などもできたことであらうか。ところで同行の中保氏はあまり日數がかゝつて用事がたまつて來るので、途中から引きかへす事になつて、到頭私ひとりぼつちで前進する事になつた。此度の支那事變のやうな大戰爭のかまへではないから、私はリュックサックも背

負はずピストルも持たず、小さな手さげカバンにステッキ一本の突破行である。

ところによつては燒けた橋の臺木が燒けて空中にぶら下るレールの上などは四つ這ひをやる。今度の戰爭のやうに大勢がカメラを持つてゐたら早速誰れかにパチリとこの珍景を撮られるところだ。しばらく行くと今度は敵が今朝やつと修理したばかりのトンネルを破壞してゐると情報が入る。これが不通になると前へ出てゐる工事人夫は皆立往生、兵はその人夫の方の警備に行つて手うす、○隊長以下はその長いトンネルのかなた數里にあり！　其時勇を振つたのが驛警備のひげの軍曹、機關銃を積んで數名の兵と、これも落ちつき拂つた敵の方でもねらつて居ると云ふ滿鐵の秋森氏、眞靑になつてふるへて片言でおどおどする滿洲國人の運轉手を私までが手傳つてなだめてすかしてトンネルの敵を追つぱらひに、私は初めての戰鬪見物に出發前進した。

その思出のふかいトンネルを越えたかなたに遠く敵ののろしの煙りが立つてゐたのが丁度現在、大日向村がある方面なので思ひ出が深い。

こんなふうにして漸く五日目に敦化の驛へ兵隊さんと一緒に貨車から下り立つと、

そこには長谷部○○長だの○○長だのラッパ手だの軍馬だの何か物々しい樣子である。

すると空の一隅から一臺の飛行機が忽然と現はれて、それから降り立たれたのは當時の關東軍司令官本庄中將閣下に新聞記者が數名、本庄さんはじめつい數日前に奉天で話をかはした人々ばかり、やあやあおやおやと一行は今朝奉天を出て興凱湖の方を一廻りして此處へついた軍裝もまだ颯爽とした姿なのに、私は奉天の大和ホテルの入浴でおめかしをした先日とはことかはり、疲れて汚れて其辛勞お互ひに顏と姿を見くらべあつた。

かういふ往路だから歸りには、もう旅程も急ぐし是非にもどうにも飛行機でと思つて、毎日翌朝から例の深田のやうな路を、車から轉がり落ちさうになつて飛行場へ通つて見るが、毎日滿員、私ばかりではない、軍人も社員もついがつかりしては飛行機會社の人と喧嘩を一とたてやつては宿へ戻つてゆくのである。

到頭何日目かの飛行場では私はもともと通りいさぎよくてくてく歩いて歸らうと決

心をした時、旅途の三分の一くらゐは通じた汽車も、ぴいつと飛行場までかすかに汽笛を響かせて今日の分は出發してしまつた。

すると正に出發しようとする飛行機の操縦士の某氏がよくよく見兼ねたのであらう私の目方を尋ねてから、數町てくてく歩いて何處かへ電話を掛けに行つてくれた。其時私は四十キログラムと一寸の體量で外には例の小かばんが一キロ半くらゐ。其日定員一ぱいすでに積まつてゐた乘客が幸ひ肥つた人が少なかつたか、荷がすくなかつたか、義俠の操縦士がへつた油の換りに私を、會社のこれを喜ばない地上勤務員と議論までした末乘つけて空へ舞ひ上つてくれた時の好意は數年後の今となつても忘れられない。

吉林省の密林山岳地帶は相當エヤーポケットがひどかつたが、五日の難コースはたつた二時間、匪賊がのろしを上げてゐようが、トンネルが長からうが、橋が壞れてゐようが話のやうにあの地上の苦しみはちいさく可愛らしくなつて、共に苦勞の夜をすごした警備の場所や、橋を修理してゐる苦力どもや、おもちやのやうな汽車の走る

の、裝甲列車の迷彩、上から見る今はそれ等がおとぎの豆王國のやうであつた。

空からの都市視察といふ名目で羽田空港へ集まつたのが、批評家の長谷川如是閑氏をはじめ、東京府の水谷技師だの佐藤工學博士、金澤工藝の田邊孝次校長、美術批評の黒田鵬心氏などと云ふ面々、飛行機は朝日新聞社の格納庫にあるいろいろのを使つた。

如是閑氏と私とは同姓だから親子のごとく兄弟のごとくでよからうと惡太郎連の惡口によつて定められ、如是閑氏と二人モノスウバアへ乘つけられた。

地上を視察するのが目的だから高度は三百くらゐにして、東京の東南の部分を一とめぐり、丁度ひどい大雨のあとの夕方で、飛行機が浮び上るとすぐ三浦半島が下に見えて其の先の相模の海から伊豆、夕ぐれの紫の雲に富士が浮び出す。こなたは房總半島かどんどん下に見えて來て、東京灣は湖のやうになる。武藏野の奥の山々は模糊として、殊に葛飾野のあたり、筑波山の方ははつきりしない。多摩川と荒川が東京市の形をふちどつて居る。東京の街はまだ低く平面的で細かい部分が多い。私達の小さなモノスウバアは翼が胴より上へついてゐるので下を見るのには大べん都合がいい。飛

行機は今一つやはり小型の僚機と雁行して行く。これは大へん氣持の和やかなものである。向ふの機の人と挨拶を交したり、笑ひあつたり、たいさう向ふがゆれてゐるなと思ふのはこつちが下つて向ふが上るからで、向ふの機でもさう思ふさうだ。

私は將來、遠方海上航路などは飛行がふんだんに我々が持てるようになつた場合は二機以上で行くのがよくはないかと思ふ。常に幾割かの始めての乘客を乘せるであらう普通旅客コースには、實際にも天候の惡い時などは乘客の安全感にもどつちも僚機相ともなふのはきつとよからうと思ふ。すくなくとも海上の事故のやうな時には何とか役に立つであらう。

山西省の所口鎮や太原附近で盛んにまだ皇軍が苦戰力闘してゐる時期であつた。

その山西省の〇〇の飛行場を出發して、私の乘つてゐる飛行機は、山を越えて胡地、蒙疆の方へ、向つて行く。へつついの灰の中にゐるやうな感じの、草の枯れて常緑の木の葉の一ひらもない冬の山西省は、大雨のあとの道路がひどく堀れたやうなの

がすつと擴大されたものがすなはち地隙、それが草が生えれば、いつか山の峽や丘の影と呼ばれるのであらうが、大きな灰土の地隙と云ふものは世にもわびしいものだ。

それでも大同府の傍には冬のせゐかやゝ水の澄んだ相當の大河があつて御河と呼ばれる、これが北京附近では蘆溝橋の永定河となるのだ。外長城線は北京や山海關附近の萬里の長城のやうに山の背を登つたり下つたりして旅客を喜ばせるやうな派手なものではなくつて、いとも單調に、じみに山の裾を走つている。

例の有名な大同郊外雲崗の石佛の附近の丘から段々山脈を越えて行くと圓い湖水が見える。鹽の採れる湖である。もう此處等はすでに胡地らしくやがて向ひに黃土の砂漠の中に銀色に光る——黃泥の水でもやつぱり銀色に光つて初冬のにぶい陽ざしの中に黃河の上流がゆつたりと現れ出で眼の下で大きく曲つて陝西、山西の堺をして眞直に西へ向つて行く。

後には遠く北支で一番高い山西の五臺山脈が眞白に雪を被つてそそり立つ。右手にはチヤハル蒙古の方から續く大陰山山脈が黃河上流に添つて遠く遠く千里の先きまで

屏風のやうに河の右手に立ち並んで、黄河沿岸の蒙疆の地の北をふさいで南にひらいた暖い肥汲なよき地帯にしてやつてゐる。

やがて厚和と歸化城の二つの城市が二キロばかりの並木路で一つにつながれて目の下に現はれる。樹の實にすくない山西、蒙疆の地に珍らしく厚和の城市の内外は誠によく植林されて、夏は蒙疆にめづらしい林の中の都に（？）なることであらう。

陰山の裾の方の山の邊には、黄河を見はらした仲々立派なお寺だか、道觀が見える。王昭君のお墓もその邊らしい。王昭君は山西省の生れで、胡地と云つてもお墓がこの邊にある位だから、今にしてみれば飛行機でたつた一時間位の悲劇の距離なのだがその悲話は二千年の後までも、皆に同情されてゐる。山西おかめなら胡人がさらつて行かうが、人の哀愁はこれ程忘れられずにはゐなからうが、大體山西は美人の本場で、日本なら秋田東北美人の如く色白のむつちりと無口なのは王昭君以來今に至るまではかはらない。

〇〇の飛行場へ下りたつまで、飛行機は山越しをしたにもかかはらず、實にそよと

もゆれなかつた。

飛行がスムースだと、この平らかさは凡そ天下に他にひとつも眞似があるまい。どんな上等な鋪裝道路を最上の自動車でドライヴしても、こんなに、そよともみぢんにも體に感じない事はない。實際、身體が浮いた儘すうつと千里のところを馳つてゐるのである。

旅のたべもの

私は、遠く旅することが隨分好きであるけれど、俳聖芭蕉の言葉ではないが、何んな奥地へ行く時でも「千里路糧を包まず」で、特別に、補給品などを持つて行かない。

蒙疆の奥地にしろ、また海南島の最前線にもせよ、兎も角、私などが行ける所には人間も住み子供も育つてゐる土地なのだから、無人の砂漠の探險とはちがつて、何かしら食べものがちやんとある。遠來の古くなつた食糧よりも、新鮮で營養の多いものがある筈だと思つて、成るべく向ふの品ものの、うまいものを探し出す。たまには、

チーズとかキャラメルといつたやうなものを、少しばかりポケットへ忍ばせる事もあるが、いはゆる嗜好品的なものは、一切持つて行かうとしない。

あの雪と氷にとぢこめられた蒙古の、冬期の苞の中にも、小麥粉のひねつたのへ羊の肉をきざみこんだ、温いうまいあつものがあつた。蒙古王は、それへ、彼の貴重品の味の素を少々ふりかけ、それから、唐辛子だの、味噌だのを添へてもてなしてくれた。

蒙古で一番うまいものはこの羊肉である。それから、蒙疆黄河上流から採れる金鱗の鯉などの河魚、こういふもので主食榮養の献立をつくれば、蒙疆へ移住しても、健康でお尻が落ちつける。野菜も、支那人が侵入してゐる區域なら、樂に白菜其の他が得られる。

南支那方面へ行けば、盛りの時期には安くて、そして天下の珍味の荔枝をふんだんに食べて、魚も海魚は別として、河魚は支那だから、大味で然も危險だから、へんなお刺身なんぞせずに、和洋折ちうの料理に工夫して食べる。

椰子の果肉の白い脂は乾酪より、アマンドより、くるみよりうまくて、然も榮養百パーセント、食鹽でもちよつと食べれば、植物性乾酪（チーズ）として素晴らしい。

南支那海、佛印方面以南の地には、これは又あまりにも、土地の美味や榮養物が數々ありすぎて困る。

こういふ榮養攝取方法で旅行をしてゐると、何ヶ月をすぎても健康で、食物から起る鄕愁などといふ島國的な、けちな事にならない。よく歸朝の便船で、門司へ着いたら、早速、あれもこれも食べるのだと、待ちこがれてゐる人達が笑止である。

然し生れ故鄕の內地の食べものは、久々で食べれば、これは又更に賞玩新なりで、有がたいとは思ふけれど、新らしく私の味覺經驗に加はつた奧地、邊地の素朴な特異の食料もいつまでも懷しく、再食の日を期するといつたわけになる。

一番愚の極みと思ふのは、內地で我儘な自分勝手な食事をしてばかりゐる人たちが外地で、僅かばかりの品物の不自由にかこち顏なおかしさ、智慧のない事おびただしく、私はこの戰時下の食糧統制のおかげで、一般の人の榮養食普及改善されることと、あの過食のせいの國民病の胃腸病がなほり、晝日中の居ねむりが減り、成程、さうであつたかと、今更營養なき過食の愚に氣のつくようになるのを期待してゐる。

それともひとつ、奧地の蒙古でも、滿洲でも、支那各地でも、いや、日本の內地の不便なところでも、閉口するのは、舊式日本人旅館の食事の榮養すくなさで、乾詰の

松茸に古い魚るい、しめつた海苔にひね澤わん、旅館の惡いがい念献立で其の土地の特異な豐富な品ものをすこしも應用して食べさせようとしない。

私はさういふ時は、路傍の支那人の店から、いろいろ安くて榮養のありさうな物を買つて來て、自分に必要な食養献立をつくりなほしてしのぐ。

これからは、旅館の食事には必ず榮養量熱量についての規則をつくり、支配人や料理人も再教育しなければならないと思ふ。

それと、よき反對を見せてゐるのが兵食である。兵隊さんの手で養はれてゐる間は、一見粗食のやうであり乍ら榮養が充分で、いつも健康をたもつ事が出來る。膳立てばかり立派で、内容の皆無な旅館に滯在するより、元氣がつづく。

内地小情

寸陰風流

ゆうべ時雨と云ふよりはやてのやうな風と雨とが一と時、屋根や窓をたゝくのを聞き乍ら、ねむつて了つたら、今朝はからりと晴れて、まるで地中海の水の色のやうな綺麗で深い碧空になつてゐる。

白雲も、一とかけも見えない碧一と色だ、きつと近くの貨物線の鐵橋へいつたら、今朝は眞白な富士の遠い姿が、紫の相模の北部の山々の上に見えることだらう。

初冬のこんな氣もちの日であつた。私は蒙彊の厚和の町を出て、前にそびえる陰山の白雪の峰を越して、蒙古の奥ふかく旅に出た日、空の碧い美しさが今朝のやうにひ

どく印象に殘つたのを思ひ出した。

然しあそこはもつと乾燥した高原であるから、碧さも澄明さもまさつてゐた。寒さも正午でも零下十度よりもつとずつと低かつた筈だが、かうして碧空と枯木と、遠くと近くの差こそあれ、山の白雪との初冬の氣分は共通である。然し只陽は同じやうにさんさんと私の體にふりそゝいでも、あの冷藏庫の中にゐるやうな冷たい氣もちのよさと、此の東京のはづれの草屋のベランダのぬくぬくと暖かい愉しさとのちがひがあるだけだ。

犬は私の足のさきの踏石の上で日なたぼつこの居眠りをしてゐる。今日は日曜なので近所の男の兒たちがしきりと遊び相手にこの音無しい白犬を呼んでゐるが、老犬は聞こえないふりをして私に頭をなぶられ乍ら寢てゐる。蠅や天とう蟲がガラス戸へ集つて僅かの餘生を愉しんでゐる。

私の駄犬は、皮革の首輪がちぎれて落して了つてから其儘になつてゐるが、首輪はなく共首の周りに光る毛の澤山まじつたふさ〳〵とした白い毛が生へてゐり飾りのや

うになつてゐる。近所の往來を革のひもや、立派な首輪で散歩に連れ歩かれた犬共はさつぱりこの頃、姿が消えてしまつた。散歩に人間をお供に從へないで、女中さんと一しよに買物にいそ〳〵付いて行き、夜は往來へ出て番をし乍ら馳け廻る階級の犬だけが少し殘つてゐる。私の駄犬もこの種の中の理想的タイプで、丈夫で賢こくて、おとなしくて近所からお尻や叱言の來ない先生なのである。

昨日おとつひ、夕方のなごやかな暖氣の時、仕事のあひ間の疲れやすめに、私は小さな庭へ出て落葉を掃いた。二三日積ると山になるのへ火をつける。あつちこつちで風のない夕方は落葉を焚く烟りが、初冬特有のひくい白い夕もやになつて、林と家の間にたなびいて、其儘暗の底へしづんで行く。

落葉を焚き乍らふつと、これを畫室で焚く愉しさを思ひ付いた。電氣ストオブで暖めてゐた畫室も今はそれが出來ない。漸く一つの安い時局型の圓い石炭ストオブを町で見つけた。二三日前からその新入者を畫室のあつちへ置きこつちへおき換へ漸く場所がきまつて、それをやがて赫々と燃やし乍ら今年もどうやら畫を描ける筈になつ

た。

落葉の中でも細い石榴の葉はしめつて燃えにくい。櫻や栗はよく燃えて愉しい。そこで私は戰線へ行つた時のズボンを出してはき、物置きから空俵を持つてきてせつせと落葉を集めてつめ込んだ。それから栗や柿やねむや雜木のいらない枝を鋸でぶきつちよな手つきで切り落した。薄や百合や牡丹の枯れたのも、みんな庭鋏で刈つて出窓の下へ積んだ。犬は早速その刈草の上へ氣持ちよささうに寢ころんで了ふ。

ゆうべの風と雨で私が掃いたあとへは、又いろ〳〵な葉が散りしいてゐた。濡れた黒土の上へあの「吹き寄せ」と呼ぶ友禪模様の通りに楓、栗、さくら、松の葉、竹の葉なんぞが稚趣ある自然のデザインをつくつてゐる。

今朝の便の中のハガキには、香港、佛印と二三年暮した知人が久々の内地で、家は大名のやうなのが見つかつたが、寒くてふるへてゐると書いてあつた。

私は俵へうんと積め込んだのはちと無風流ではあるが、あれを小さな籠へ盛つて、石炭と一しよにぼう〳〵焚き乍ら、寒い日に今描きかけのあの美くしい西湖の風景を

つゞけて行かれると思ふと何だかちよつと風流で愉しい、併しもし又急にどこかへ遠く出かけでもするやうな時はその落葉籠を、風流を愉しむ間もなく其儘春の花壇の堆肥にして了つても、氣分だけはもう味はつたのだから、別に名殘り惜しいとも思はないだらう。

春庭

山櫻は風情があつて大そういゝものだがさびしい。一般の一重ざくらのあの染井吉野は私はあまり好かない。晩春の濃艶にふさはしいあの八重櫻がかへつて好きで住み付く場所には必ず庭へ一本植ゑる。うす色の八重桃はこれまたさらに好きであるけれど、これは今の私の庭にはない。もう十日か半月を過ぎた、春のをはりのころ花の盛りの長い八重櫻がもうそろ〳〵ひら〳〵と散りかゝり、若葉はみんなすつかり芽を出して、牡丹がむせぶやうな匂ひで豪華をほこる。藤が咲く、蜂だのあぶだのがむんむんと花の上に飛びくるふ。つゝ

じが己が品の低いのを遠慮するやうに、はしの方で紅や白や牡丹いろの花を樹身一ぱいに飾りたてる。

さういつた頃のある日には終日ひゝとして煙るやうに音もなく春雨が降る。

雨に花の匂ひは高く發散せずに、ひくく小さな庭中に漂ふ。うしろの家の鶯がもう春の始めほどひんぱんには鳴いてくれないが、時々この濃艶きはまりのない美しい甘美のきはみの天の園のやうな春の一瞬を更にありがたいものにしてくれる。

この二、三年來はそれを喜悅する折もなかつたが、今年は久しぶりで家にあつてか、或はまたどこぞでか、かういふ春の極みの一期にめぐりあへるやうな氣がする。

様々の生活の品のたつた幾品かだけが少いだけでしきりと乏しがる人々の氣持の方を貧しい氣の毒なものに私は思ふ。

戰のさ中には勿體なさすぎるほどに身のまはりには天地の豊かな豪華がとりまいてゐる。

女性風俗雜感

それが盛りだつたのはもう昭和十四五年あたりであつたが、若い女性たちが髪の毛を額の生え際の左右あたりからいくつかのあの渦卷と云ふ餅菓子か、大きいさゞゑの蓋ぐらゐな大きさに髪の毛を渦卷にして、すこし皮肉にやじれば動物か小鬼の角の芽ぐみかけたやうなあんばいに、額髪の上へねぢり付けてあるのが流行した。無論その二三年前から巴里あたりの結髪の雜誌にはそんなのが現れてゐて轉載ものゝ日本の雜誌にも見えてゐた。

然しそれも兎も角クロウトの美裝師がはや散々苦心して流行にまで、でつち上げたものであるから、この鬼の角の芽ばえのやうなのを可愛いゝ光澤のいゝお出額の上へ

載つけても、無論、まんざら醜いわけではない。それが愛らしく見える愛嬌のある顔もあつた。然し段々流行が擴がつて娘ばかりでなく、相當年増の女性でもこのねぢり渦卷を額ぎわに食つ付けたおしやれが大分ふえてきたが、どうも相當いゝ年をして何の批判もなく流行ると云へばこんなさざゑの蓋のやうに苦心して毛をでつち上げて、別に馬鹿にそれによつて美人に見える譯でもないのだが、ひまをつぶして居た。

口が惡くて本能的に女の美に對しては敏感である男性側から必ず、何とか一度は冷やかされるか、ふふんと苦笑と冷笑を受ける事を、何も相當の年増のインテリ女性がやらなくつてもよささうなものだと、或る時このねぢり渦毛を食つ付けてゐる知りあいの記者などをやつた事もある美人にかう云つた。

「女つてものはへんなものね、もしも此のねぢり卷のさざゑの蓋みたいなものを、誰もやつて居ない時に、お出額の先きへ食つ付けて往來へ出ろと云つたら、誰だつてそんな恥かしい事が出來るものかと云つて、この髪の形をこはしてからでなければ、決して外を歩かないにちがひない。いゝ事だつて流行りでなければ中々やる勇氣が出

ないし、へんでもおかしくても馬鹿々々しくても流行だと他人が云へば、如何にかしてもやりたがる、奇妙なものだ」

ところでいゝ案配に、このねぢり渦毛は十五年に入つて段々減つてきたところへ、新體制の風が吹いたから殆ど今は銀座でも、バスでも電車でも消えてしまつた。

たとへ美くしからうと、又醜ければ尙更の事だが、私はこの大悟を要する時世と逆なあんまり下らぬ手間のかゝる流行や風俗は、現時風俗から取り去りたいと思ふ。

そんな暇つぶしをしないでも人間は自分の性格と顏かたち、身邊を心得てゐさへすれば、簡素で味はひの深い風俗ができるものなのを知る人は知り乍然も女は少しヒマがあると「あはれ女と流行よ」になつて了ふ。

ところで何で私が、このねぢり渦卷がちつと氣になるかと云ふと、ひとつはあれが今時の世界變動でつぶれた國、つぶれ掛けてゐる側の方でしきりと流行らせたものだからで、然も此方も支那事變の渦中で、しかも東亞共榮圈にまで發展して行かうと云ふ覺悟の時に、流行つたので、嫌だと思つたり、どうも戰爭にぶつかつて來た、男の

ひとに對してお恥しくも思つたのである。

フランスにせよ英米にせよ、戰爭はさけ難いと覺悟はそろ〳〵つき乍らも、一般の人の覺悟のほどに、しいての自惚や相手を見クビる我々が考へて大に不滿とブベッすべきものがこんな風俗の一端にもちら付いてゐたのだつた。

私はちようど、和蘭ベルギー、佛蘭西と見る見る間に獨逸に將棋だほしのやうに押しつぶされて行く瞬間に、支那のあちこちを旅行してゐたが、丁度靑島上海間の航路で英米の婦人船客のうちで、若いおしやれ達の二三人が、おそらく本國の方から旅行してきたのか、或は植民地でしきりと本國の流行を買ふ階級かいづれがだが、颯爽と軍裝を取り入れた隙のないほど流行からいへば氣のきいたのや、看護婦の服の類似したと云ふより、そんな眞劍味の心持ちでなく、丁度レビウや何かの女の兵隊や軍裝のやうな氣もちで、スマアトな流行服に仕上げて、それに寫眞機なんぞを兵器のように兩肩に十文字にかけて非常時を遊戯化して得々としてゐる女たちを見て、心ひそかにこれぢやあ駄目だなと相手方に對してだが嘆息をひと事ながらもらした。

しかも時期はもうフランスまで敗北しかゝつて、數十萬の大陸にある英兵の安否、毎日英米側の上海の都合のいゝラヂオを聞く男達でさへ、皆殆ど號泣しないばかりの表情になつてゐる時、彼女等はあんまりラヂオも聞かないで、大して悲しさうでもなく、この身裝で細卷のタバコをふかして美しいあごをサロンの天井へ向けてゐた。

流行や風俗といふものも、その國情をさとるひとつ、怖いものだなと思つた。

些細な女子供の髪形、服裝などの一少部分が、なに大局に大した事はあらうやと見くびり輕んじてばかりはゐられぬ事で、日本の現代女性風俗なるものも、日本が世界の四分の一を制覇するか否やと云ふこの開闢以來の大仕事を見事になしとげ得た時には、必ずや當時の風俗民情は大に後世の史家によつて、又國家の興隆を望む傑れた人々によつて研究されるであらうし、この一部のおしやれでさへも、今一般の低い階級に、小遣が充分ある時だから、うつかり捨てゝおくと、單に東京の一部の流行でなくなつて、上の好むところ下これより甚しきはなしで仕末に困る。出來うべくは現代婦人風俗も大に後世に範をたれたい。

ところが御覽の通り、範をたれるどころか、女の風俗、ことに服裝は混亂、矛盾、非は漸く一般がさとる所まで問題なく漕ぎ付けたが、何とか是れ此の際思ひ切つてやつてしまはねばならないと思ふ。

もし泰平の御世、事なかれの時世なら、これからまあゆつくり二三十年を待てば恐らく否應なくじよ〳〵に日本現時の女の服の混亂も大體理想の所まで行くらしくは見透せるが、現時の情勢はそんな呑氣な時節を待つてはゐられない。

戰時下の新體制が啓蒙期の明治維新と比べてあらゆる日本の部門にどの位の第二階改新が行はれるか、又我々が實現し得るかはこれからの事に屬するけれど、男が明治の散髪斷行に比べて、女は七十餘年取り殘されたまゝ平氣で、今だに彼氏のちよん髷と筒井筒友白髪をちかつた彼女の丸髷、島田其他のやゝこしい結髪がひとり後家を守つて多少殘つてゐる。あいにくそれが見る眼を愉しませるものがありとしても、若し男が一度あの髪結や美髪師なるものに愚な長時間をつぶし、三四度結べば頭の中央には大きなかさぶたが出來てはげになりかゝる島田なぞはその重き事は鐵甲よりやゝ重

く、油で汚れて臭い不潔な島田、丸髷等々を一度體驗したら、忽ち廢止賛成たちどころになるだらう。

何所の國の歴史でも、革命や革新改新がある時にはそれが偉大な效果を上げる場合には必ず風俗も重大な役目をして一新する。そしていつも改められる古い方は必ず繁雑、多飾、巧緻に過ぎて身うごきの取れぬところまで來てゐて、改新の方はいつも清素簡潔なものにかはる。さう云ふ時は必ず國が興るのは今私の讀みかぢりを待つまでもなく讀者は世界、日本の歴史のそれで知つてゐることだ。

ごく手近なところで德川末期の遊女の髮形、それが又一般流行の原泉となつてゐたが、まづ玳瑁の櫛笄の巾廣なのを左右に十幾本もさして居る。あれで島田や立兵庫などと云ふ、大きな大きな髷、かよはい運動不足、榮養不良の女たちが頭に數キログラムのものを載せてよくもがつくり首が折れなかつたものだ。

頭髮がこれだからそれに釣合ふ、身動きのとれないやうな衣裳、長くひきずる裾、だん〳〵汚れや痛みが面倒だから人間は動くのが億劫になつた。その時分は支那でも

纒足に加へて清朝の人をおどかす樣な玉實をつゞつた。芝居の和唐内の衣裝みたやうなのが現實に行はれてゐたが、日本での一般の通商や交際は支那のみにあつたので、それと相互して、こんな馬鹿々々しい華麗になつたのだらう。そして、清朝も、德川幕府も亡んだのだ。

こんな昔の物語りをこゝに持ち出すのも、實際ひと事でない、反省の少い女といふものが、あつちこつちに知らず知らず引きずられて驚くべき滑稽なる風俗を後世にのこすから、我々女性もつてつねに戒しめて居なければならない。

私は、近年いろ〳〵の機會を得て、東洋温帶圏の人間の風俗のうち、支那の北中南部、蒙古、滿洲族、佛印安南族、また日本の朝鮮半島の風俗、服裝をみて、いろ〳〵と考へさせられるものがあつた。

日本の内地の和服しか考へなかつた人が、或は朝鮮服を初めて見、その簡素と色彩をほめたり、支那服を禮讃したりするが、私は成程、日本の取り殘された和服の非活動はこれは現代日本として實に矛盾した不思議な一つの殘れる存在であつて問題外に

おいて、朝鮮服、支那服、或は佛印安南の服も皆、これ多少の古風過去に屬するもので、不充分である。

殊に朝鮮の單純な色彩美を讃へる人があるが、賛成しない。あの單純な色彩配分は、原始から退歩の方に近い。プリミティブと進歩した簡素とは、同じやうで大きな人類進歩のへだたりがある。

佛印の安南婦人の服裝といへども、下は長ズボンで袖は細く、和服に比べればずつと働くのに便利で、事實、多くの女は天秤棒をかつぎ、農婦もそれであるが、然し決して滿足なものではない。殊にこの國の風俗の内で識者の眉をひそませるのは、服裝の品質、身につけように、べら〳〵、しやなしやな、ぢやらぢやらとした點で、上下を通じてこの感じだ。これは外の東洋のどの國にも幸にして發見しなかつたものだ。

日本の和服が、德川時代の都會風俗にはやはりかう云ふ印象を外來者にあたへたものであらうと思ふ。いゝ案配にうつかりすれば安南人のべらべらじやらじやらより更にもつとその可能性を持つて居る和服も、流石に日本人が着ればそんなにひどく感じ

はしないが、然し油斷は禁もつ、もし、いきなり未知の遠い國の人がやつて來たら、どう彼等の心眼にそれがうつるかは多少想像できる。たとへば盟邦ドイツの國人が日本を信頼し張り切つてやつて來て、曾つて想像もしなかつた、すこしじやらじやらした服裝を多少でも日本の一部女性から發見した時、何だがヘンになるだらう。

然しその女の和服も、改良は日日の新聞にまで論議されて、女の子供、女學生、働く女たちと、どんどん必要にせまられて變つてゆき地盤はぢりぢり縮んでは行くが、さて因習の深さ、大英帝國の如く、朽ちかけては居ても、さて倒れるにも、中々大根が深く大きく中年女の服裝改善には骨が折れること一と通りでない。

然し來年あたりになつたら、男の國民服のやうに、專門家、特志家、百貨店共同で紙上の案でなく、實物をこさへて、隣組あたりから切り込んで行つたなら、案外着てみれば便利なのだから、あの夏の簡單服のやうに、急に女性大衆にひろまつて、今更、何でまあ長袖やお太鼓を今まで食つ付けてゐたんだらう、と思ふやうになる事を願つてやまない。

いまが替へ時

明治の初年にこんな唄が流行つたさうだ。

『ちよんまげ頭をたゝいて見れば因順姑息の音がした』

そしてぢやんぎり頭の音の方は文明開化とほめてあつた。

電車の中で、前に腰かけてゐる有閑婦人の錦キラのお太鼓むすびを見乍ら、この唄を思ひ出したらふつと昭和維新のかへ唄が出てきた。

『お太鼓むすびをたゝいて見たら因順姑息の音がする』

『下手の考へやすむに似たり、和服改良諸家の案』

『袖とお太鼓お國へさゝげ、丈夫に身輕に御奉公』

その日に丁度、輝ク部隊の日支親善の會合があり時雨女史に出逢つた。ひとつこんな唄を『輝く』のパンフレットへ載せてごらんなさいといつたら、忽ち

『大衆雜誌ぢやあるまいし―』

と一蹴されてしまつた。

とはいふものゝ、時雨女史といへども今は論議をするまでもなく、袖、お太鼓、コシマキ等々の愚はよく知りぬいてゐるので、次ぎの會合には、さつさうと洋服を―それも流行なぞとは關係のない、事變以前にこさへておいたのを一着に及んで現はれた。

『私が洋服になるとモルガンお雪さんみたいだらう』

正にその通りで、却々時代ばなれがして明治調である。時雨女史の獨特の味のある和服姿を知つてゐる連中がやゝわびしがりさうでもあるけれど、私は彼女の年は取つても、この際改良すべき事はそつせんしてやらうといふ意氣に感激する。

『をかしからうと、見つともなからうと、今はそんな下らん事をいつてゐる場合ぢ

やない。是非かういふ服裝をあなたが先きだちでやつて下さい』

私は眞面目に彼女に頼んだ。簡單な服裝にかへつた場合、體つきが可笑しいのや見つともないのは、つまり舊服裝と舊生活樣式に長い間ゆがめられた醜い體の決算なのだ。體からこの際たゝき直して行かなくちやならない。

梅雨雜記

梅雨の入りである。しとしとと雨か降り出した。

たいていは毎年梅雨に入つてから十日も半月もまだ五月晴れの名殘と、夏衣のさはやかな晴天がつゞいて、今年は空梅雨ではないかの、田植があつちこちで出來かねるのとそろ〳〵云ひ出す時分から、漸つとしと〳〵と本當の梅雨になつて七月の始めごろまでつづく年が多いように思ふ。そして何時の間にかすつかり東西南北、寒い山間の水田までに青々と田植がすんでしまつたと思ふと、すぐもうお盆になる。

これは只そんな具あいに私が思つているのかも知れないので、別に根よく統計を取

つておいたわけでもないが、毎年毎年のその頃の出來事、又は私がしたことを思ひかへすと、自然その折の天候や風景などのことも眼に浮んで來る。さう云ふ時、大體いつもそんな梅雨の印象的日どりのような氣がする。

さて去年は丁度、五月から中支へ行つてゐて、東京の水道不足をそろ〳〵出かける頃に味はつて、さて中支方面へ行つて見ると、其所も、どこの河もクリークもみんなひどく水位がひくかつた。

、江蘇實れば天下餓ゑずといはれるあの江蘇兩省の田はみんなひびわれて名物のクリークは河底に小溝のようにちよろちよろ水が流れるばかりだつた。東亞共榮圏の支那の大きな米びつが、まあこの樣子では秋にはどんなことになるだらうと人事ながら心配をしながら、汽車の窓からながめてゐた。

と同時に、事變の初めの年に上海附近のクリークにこんなに水がなかつたら、皇軍將兵の進擊にどんなに好都合であつたらうに、おんなじ旱りの不作なら、あの年であつたらよかつたのになどゝ考へたりした。

そして梅雨の終り頃には、日本にも漸く雨が降つたようだつたが、然し、中支那の去年の收穫はずゐ分不作だつたさうだ。

その雨の降り出した頃は私はすこし南へ下つて、厦門・汕頭から臺灣へ出てゐたが、今度ははしりの颱風に追ひかけられて、散々海上で苦勞した。そしてその私の乘つたぼろ汽船が逃げまわつた颱風は、臺灣の東海岸から新高山あたりをひよいと一とまたぎをして、厦門と上海の間の福州附近を暴れまわつた。

その風のおかげで、今度は田植の水に困らない臺灣のお米の第一期米の、刈り入れ時の稻をなぎ倒して、そしてそのあとが晴れ上つて南國の熱氣で蒸れて、稻を刈り取る間もなく腐らしかけた。

『五風十雨もおだやかに』と子供の時分習つた種蒔三番双の唄の文句にある通り、雨と風と日光をコントロールして拔本塞源的な農事天象振興法も、もうそろ〳〵工夫

研究されてもいゝのではないかと思ふ。

その颱風を逃げまわつて、十數日を海上に無爲に暮した時、船中の食堂の雜談に、日本科學は先づこの年々の颱風の被害が恐らく數億圓にのぼるのにもかゝはらず、ちつともあの颱風の發生した最初のとき、まだ龍卷の毛の生へたぐらいの時に、何とか處理してしまふ方法を研究しないのだらうかと私は船長さんに話した。

このすゐ分發達した、氣象やその他の部門の科學がありながら、颱風が進路から風速からすつかりわかつてゐながら手をつかねて、昔の蠻民とおなじく、おそれおのゝいて、只ひたすらに來るのを待つて、そして數時間で數億圓の犧牲を風の神に捧げるなどとは愚の至りだと思ふ。

こう云ふ、今日はまだ空想にちかい畫人のおもひつきも、然し何時かは實現されて、颱風季節には颱風解消船や飛行機が發生地域に出動してゐて、大して廣くもない地域なのだから風のタマゴを比較的簡單な方法でつぶして廻る。昔は颱風などといふ

もののために、年々莫大の愚を拂つたと、ちようど今の傳染病の防疫ぐらゐの手段になる時が來ることと信じてゐる。

移りかはり

東京驛の階段を出むかへの人たちと混つて、南支那から歸つてきた時雨女史が歩いて行く。きやうだいの遠慮なさで、平素から口の惡い私は、この兎も角も遠征をなし終へた老女史を、ちりめん部隊長なんどと揶揄しながら、氣が付くと、いつもは物しづかにそろ〳〵と正に故歌右衛門丈よりやゝましなくらゐな速度と歩行ぶりの時雨女史が今日は颯爽と一行の先頭を切つて、しかもその足なみも中々に正しく行進して行くのであつた。

うれしいやうな可笑しいやうな氣もちで早速大いに賞讃すると、彼女は意氣軒昂とこれでなくつちやあの黄浦の×××の何町も離れてゐる厠所——支那ではかう云ふ

——へ用をたしに行つたりダイハツの乘り下りなぞできないよ、と勇氣りん〳〵たる朗かな返事で、

もうこれからは『さうさつさと歩いちや困る』と私への苦情はやむことだらう。

一たい彼女をトップに私をビリに生んだ母親が大の改新禮讃家であつた。安政年間に行燈の寺子屋からその人生ははじまつて、昭和に死ぬ夜までラジオを愉しみ、小豆に砂糖ばかりの菓子より、バタ牛乳を入れた菓子の方が榮養が攝れると私に說敎し、娘が渡歐すれば必要上アドレスだけの羅馬字をおぼえて、七十餘歲で入手をかりず、はじめて洋文の宛名を書いてのけた。三年間一週一回づつめい筆をふるつた。

この不揃ひで奇妙怪々なる洋文字は、それでもちやんと遠く地球のうらの娘の手許へ毎週屆いて、ついでにフランス人の門番と郵便配達人共をして、日本の母親の情愛に感動させたものであつた。

この人の娘だから明治十何年うまれの時雨女史も、見事この事變といふあらゆる變改の大ハードルを飛び越えられて、若いものと一しよについて來られるのだらう。

しかもこの母は、兩親の家は德川幕府の旗本で、明治の維新にはあらゆる物を失つた。少女時代には遠州三方ヶ原の開墾や濱名湖の海邊で汐汲みまでしたことがある。

そしてお上から親孝行の褒美を貰つたさうだが、つまりそれはその親の方は反對に德川末期の典型的な祿ぬす人、いざといふ時は何の役にも立たず主家を滅亡させた無爲無能の人々のうちであつたわけだ。

さういふ腑甲斐なき、江戸在住の大部分の人間の自然に沒落してゆくのを、私なぞもすこしは見聞きして覺えてゐるが、時雨女史の方は本當に與るものと亡ぶるものの經過を見たりふれたりして育つて來たのである。

だから彼女は年を取つた女性にめづらしく、いはゆる現狀維持を好む人間や、義務は敬遠して既得權ばかりふりまはすやうな人間をにくんで、よきこと、正しかるべきことに立直ることに贊同し、自分も立止らずに歩かうとする。

さて、そこまではこの姉と妹と大いに共通のやうであるが、こと一たん藝術になると少々ちがつてくる。彼女は演劇演藝をはじめその他德川期藝術はよくわかるから、

事それになるとその傳統を兎角いつくしみ引つ張つて行きがちになる。

私の方はよく知らぬこそ天の幸ひ、どうも德川中期以後に發達したあらゆる——多分あらゆるといつていゝだらう——文藝演藝その他のことが、多分に亡國的なのできらひといふより、これはおそろしいことにもおもふ。

曾ては、大ひに好きであつた、又たしかにいゝものではあるけれど、あの春信以下勝れた浮世繪などといふものも何と文弱の極みのものであるか。

如何によくつても、これは警戒しなくてはならない美しき妖しくもろき枝で、もつと本道の朗らかで丈夫な根幹へかへらなければならない。

論より證據、まあ××へ行つてごらんなさい。××人の中には、まるでわれ〳〵の德川期の芝居の二枚目そつくりなにやけ男や、人絹のべろべろしたのがすきな、裾長のじやらじやらした女の多いことよ。

颱風防戰

大工の棟梁と私とは窮餘の〆〆案を到頭考へ付いた。これからその變つた屋根を造りはじめるのであるが、これも非常時物資統制時代の一つの小さなカタミに後々ではなるのだらう。

出入りの大工さんは、南向きの高臺のはしに建てられて、普段から普通より脊高い恰好がまづくて、その上もう大分古くなつた白ペンキのはげ斑が、近隣四方から眼だつて可笑しかつた私の住居の二階家は、昨夜の風速三十七メートルには無事なはずはなからうと早速翌日見舞ひにやつて來ると、案の狀スレート葺の屋根は丁度迫擊砲の

夜襲を食つたやうに大小數個所の穴があいてゐた。

それでも飛んでしまつたらうと思つた大庇は夜中の私達の大防戰で、厚いトタンがもみくしやにむけ上りながらもへばり付いて殘つて、階下の被害を多少減少させてはゐたが兎も角、二階の室は穴々から落下する雨水で漆喰壁はみなぶく〳〵に落ちかゝつて住むに堪へない有樣だ。

大工が引つぱつて來たブリキ屋は、どうせ非常時なんだからまあ雨樋なんてゼイタクなものは當分我慢して貰つて、屋根の穴だけは何とかして上げたいが、數百軒の修繕の申込に對して、大枚十枚のトタン板と、バケツや如露にこしらへかけた分に古トタンの叩き直しまで入れても心細いかぎりのストックなのだから穴の蓋なんぞにトタンなどとはもつての外だと、それから物置の板戸、古板、古だたみ、緣先きのしやれた蒲ござ箱流しのお古まで總動員して屋根の上へ乘つけて吳れたから、たゞさへ私の見つきのよくない二階の屋根は更にまた異彩を近隣に放つことになつた。

丁度その內に防空演習になつたのだが、もしそのまゝで本當の空襲でもあらうもの

ならこの平凡な半郊外の町の恰好な目印になつてしまひさうな可笑しな屋上の有様である。

ところがブリキ屋が苦心の仕事をしたその晩、またたつた中一日おいて颱風の後腹病みぐらゐな風が吹き出し大雨がざあつとやつて來て、屋上防禦のござや板片のあるものは落つこち、あるものは半分飛んでぶら〳〵になつて、雨は盛んにまたも漏るので、寢室の寢臺は疊んでしまひ汚點だらけになつた簞笥も片づけられて、そのあとの部屋の中央には脱して來た二枚の大板戸を兩方から傾斜に立て合せてその眞中には庭から拾つて來た飛びちぎれの雨樋を置いて室内の落下水を一方のたらひの中に集める工夫を凝らした。

隣の畫室の方は古だらひ、古桶、漬物樽、ストオブの受け臺、何でも口が廣くて水を受ける面の廣いものなら大きな筆洗に至るまで持ち出した。子供の時分『名古屋山三浪宅の場』といふ芝居で座敷へ大たらひを一つ雨もりに持ち出す場面を、窮乏のシムボルのやうに思つたものだが、時はこれ非常時、いざ自分がやることになつたら、

たらひや桶の數からしても、芝居より本物の世話場の方がもつと大袈裟だ。

しかしてこのしぶきのトバッチリは氣の毒にも修繕を受合つてゐる大工さんに忽ちふりかゝつて、雨が降つたり降りさうな空模樣になりかけると忽ち大工のところへは速達だの大々至急の朱書きのハガキが泥ナワ式だが連續發射される。

そのくせまた、秋晴れのいゝお天氣が幾らかつゞいて、壁のヘンな菌やカビがいくらか減つてやゝ人心地がする時には、まあ非常時だ、われ〳〵のやうなたゞの住宅用の家は一番あと廻しにされてもいゝ。先づ緊急の仕事をしてゐる方を直して、半年ぐらゐはガン張つて、四隣を風靡する屋上の珍景だつて平氣でゐようといふ元氣さへも出るが、さて一旦ざあ〳〵ぼたり〳〵びしや〳〵と來ると本當に呑氣な大工奴と、さんが奴にかはつて腹を立てる。

追擊砲のやうな大屋根の穴は私と女中の手では如何とも仕様がないが、そのほかにも無數にスレートの破れた隙間や、ずり下がつた個所、羽目やふちの板の脱れたところが出來てゐるのだから東西南北の風次第で、今日こちらが漏るかと思へばほらまた

あそこからとところきらはず水が落ちる泥がおちる。到頭堪まり兼ねて二階の窓から飛び出して女手ながら一時の手入れをやつて見た。その行動の結果今度はいよ〳〵空襲となつた時にたとへ燒夷彈が演習のやうな都合のいゝ場所でなく、もつと厄介千萬な屋根の隅や軒の間隙に落つこちても平然と處置が出來る自信がついたが、さて肝腎の二階の大屋根の大穴の方は小さな梯子をふり廻して見たが寸法が足りなくて登ることが出來ない。

私の家の女中も當年十九歳の少女であるけれどこれもなか〳〵弱卒でなくつて、颱風の夜中こはがるどころか、大いに奮闘協力して防戰をしてくれた。

颱風は丁度夜中の三時ごろから眞南にかはつて正面からぶつかつて來た。階上はもうずつとその前から屋根へぽか〳〵穴があいてしまつて手の付けやうもないが、階下だけは防禦しないと人間が住まへなくなるからと思つてゐる矢先きに、南面のサンルーム風に出來てゐる廣緣の欄間が一と息にふうつと羽根が生えたやうに西の庭へ飛んで行つたのをキッカケに、今までぽとぽとつつましく雨もりのしてゐた場所が忽ちガ

ラ〳〵と何枚もガラスが割れる、戸はみんな弓のやうに曲つて今にも脱れて飛びさうになる。雨と風とが一度に家の中へ飛び込んで來て、壁がどん〳〵くづれて落ちる。

愚圖々々してゐるとサンルームの天井も颱風と一しよに崩け落ちしさうになつた。

その騒ぎの暗黑の中で少女は私の命令通り臺所、湯殿、戸棚とあらゆる板戸をはづしてかついで來て破れた戸や、弓なりに飛びかけたガラス戸におしあてた。一番風のつよいところを家内總動員つまり人間二人がおさへてやゝ風の輕いところへはテーブル、机、火鉢、椅子とあらゆる物を積み上げて防いだ。

そして家の中で雨外套を着て靴をはいて、それでぢきに全身肌までしみ通つて濡れてしまつて少々お腹の痛くなりかけた私が、一番急所の場所へドアを立てかけて背中とお尻で押してゐる。彼女は手ぬぐひの頰かぶりに割ぼう着で下駄をはいて甲斐々々しく、二枚分の戸と欄間とを一生懸命に押さへてゐるのだ、時々猛烈な風が押しませて來ると、

『どうか手傳つて下さあい！』

と叫ぶのだが、その時はこつちの戸はなほ更大へんで私の背中とお尻は一軒の興廢を背負つて必死の防戰をしてゐるのだから、助けに行つてやることができない。たゞ聲をかけてやるだけがセイ〳〵である。

ケチくさい懷中電燈は一二時間でとつくに電池がつきてしまつた。座敷の奥に蠟燭の火がひとつ哀れにもこの光景を照らして時々それが風で消える。すき間から外を窺ふと庭木はもう大半倒れてしまつたらしく、どうも前面には何にもなくなつたやうだ。風と雨とはいよ〳〵猛烈になつて息つく暇もないが、私たちは座敷より低い縁側が壁土の泥の山とガラスの破片のおびたゞしく混つた雨水が三四寸にたまつたぬかるみの中に、ぐしよぬれで突つたつたまゝでゐる。時々私は彼女に元氣を付けてやる。

「大てい颱風の一番ひどい絶頂は二三時間だよ。もう直きに夜が明けるから、それまでの辛抱だよ。」

體が實はすつかり冷え切つて少々お腹が痛み出した時に夜が白んで來た。この際の光りといふものはまるで味方の援軍のやうなものだ。また彼女にかうもいつた。

『戰爭で夜襲を受けるといふのはこんな風でもつと〳〵ずつとひどくつてその上に彈丸がどん〳〵飛んで來るのだよ。その縁側はクリークみたいだねえ。』

さういひながら、心中ではこんな時は出征兵士の家族の女手と子供ばかりの家へは早く近所から援軍にいつて呉れゝばいゝがなと私は思つたりした。

さてこの私の家の十九歳の乙女は到頭一度も泣き聲を出さずに、たゞ兩の腕でさゝへ切れなくなりかけると叫び聲を上げるだけで、コワイなどとは一と言もいはずに、颱風の防戰をし通して呉れて、大いに銃後の乙女として頼もしいと思つたが、彼女はそれから風がをさまりかけると暖かい食べ物を作つてお腹を暖めて、死んだやうにぐつすり一と眠りしたら、けろりとかういつた。

『何だか昨夜の暴風のことは、もう夢を見たやうな氣がいたします。』

さて話は戻つてわが大工の棟梁は、以來屋根屋とスレート屋を驅けめぐつたこと三十幾軒、それほどの苦心の結果が、現在は住宅向のスレートは一枚も見付からなかつ

た工場向の白つぽい大きなスレートさへ殆ど品がないが、それを住宅用にして時局柄相すまない工場の方がもつと早く直された方がいゝのだから。

そこで、屋根をトタンか瓦に全部葺きかへるより外に思案はないがと、大工さん俄雨が降つた翌日、頭をかき〳〵やつて來て右の始末を報告した。

トタンは見たところが安つぽくてしかも時局柄無益に使用するといふことは大のゼイタクの骨頂となるし、瓦を使ふと輕いスレートの割合で地形土工事のしてある家の柱が持つかゞ問題、大工のメイ案は仕方がないから一階の周圍の屋根を片側だけ何かに變へてそのスレートを穴埋めやその他にまはさうといふのだが、これは見付きがチグハグでなほさら奇妙な屋根になるしと、最後に考へ付いたのが、茶席の建築やしやれた門なぞに檜皮葺の屋根へ中央だけ京瓦をかぶせる趣きのある屋根だ。ひとつあれを應用して中央の棟から適度なところまでをスレートに調和する西洋風の色瓦をおいて、檜皮の場所をスレートにして緣は瓦と同じペンキで塗り上げたら、まんざら見られなくもなからうし、瓦も少くてすむから二階も曲がるまいし第一經濟だし、スレー

トの數も一ばいに行かうといふ最後のメイ案を絞り出して、いよ〳〵これから實行するのであるが、さて元來が不恰好極まつた私の二階の屋根がこれからいよ〳〵奇觀か美觀か珍景になるわけで、これも統制時代のひとつのちひさな記念である。

まだ〳〵、その外に垣根の竹も品切れなら倒れた樹木の突つかひ棒の丸太も、やつと二本だけ植木屋が持つて來て、あとは窓邊の竹を切つて使つたり、葡萄棚のくち丸太まで再生させて突つかひ棒に使ふといふ、何もかもが廢物利用の見本みたいなやり方で、ぼつ〳〵わが草屋の颱風のあと始末をしてゐるが、こゝに時節から非常の草木ながらも感心なのは緣先きの柳の自力更生である。颱風の翌朝はまるでササラに番茶の滓がこびり付いたやうな體裁になつてゐたのが、たつた一週間で全身に芽をふき出し、美しい若みどりで、すりむけた樹幹を包みかくしてしまつた。

寫眞を撮る

ある朝、顏を洗ひかけてゐると女中が名刺を持つて來た。

これには福田勝治と書いてあるが私は知らない人だから用向きをたづねさせると、寫眞をうつさせて貰ひたいが云々で、そのあとに續く口上はまだ年の若い女中にはこまごまとよくは取り次げない。

せつかちの私は首つ玉へよだれ掛けのやうにタオルを卷きつけたまゝ齒ブラシを片手に玄關へ出て見ると、このあるじの出迎へぶりも大へんな格こうであるが、その客人もまたちんと取り澄ましたなみの人ではない。

中年の品のいゝ洋服の人だが、風采はあまり取りつくらはず、その手には珍らしい

古い大カバンをぶら下げて立つてゐる。

今時は見ようといつても都會ではとても見當らないあの明治の時代に、山高帽子に袴で黑い靴でもはいた人か、赤毛布のマントオを着た御仁がぶら下げたような古びた花もやうの絨緞製の大カバンで、中味は少ないらしくガバガバなのを可笑しげもなく平氣でぶら下げてゐるのだ。

然し、お互ひに顏を見合すと、この中年男の表情はやさしくはにかんだやうで、さて中々しんに一てつなところがありさうで、金もうけや、闘のもうけなんぞには緣のなささうな表情、つまり我々畫描きなどと同類緣者の顏である。そしてそれが相當の人であるといふことは、藝の人の風ぼうといふより、空氣といつた方のいゝものが彼の身體からかげろふのやうに、眼にはさやかに見えねども發散してゐるのだ。

この福田さんは紹介狀一つ持つてゐないで、突然、今日はあなたにモデルになつて貰つて寫眞が取りたいのだといふ。

藪から棒の話しでも、先づ大體はカンで說明や釋明なしに私にも解つたからすぐ座

敷へ上つて貰つた。

私は迂濶にも福田勝治氏といへば、寫眞撮影をやる人ならすぐわかるほどに、知名な然も女の寫眞を特技とする人であるのをちつとも知らなかつたのである。

さてストオブをかこんでお茶を飲みながら話すと、福田さんはその二三日前に出たある雜誌の私の隨筆をよんだときにふつと『この女をひとつ撮してみやうかな』とでも思ひ付いたのらしい。

そしてこの朝が馬鹿に美しい澄んだ冬の陽の光線で、然も明日は天氣が惡くなるといふ豫報ださうだから、彼自身一たん思ひ付けば、もう未知の私はすでに狩り出した獲物の如くに彼には決定的であつて、私が居るか居ないかなんぞは問題にもせずに遠路をおし掛けて來たのであるらしい。

もうすでに私が承知をしやうとしまいと、彼の心眼のカメラの方はおそらく、このモデルに對して撮影を開始してゐるのであらう。

ところでちやうど私の方は、幸か不幸か仕事のつぎ目で、ことに畫の制作は一段落

して制作中の喜びも苦惱も何にもなかつた。だからどちらかといへば精神も肉體もぼかんとしてゐたのであつた。それだから畫描きにとつてこの何より貴重な朝のよき光を他人に讓渡しても、別に今日は腹も立たないし、モデルにされやうと何としやうと大して迷わくでもないのである。

たゞし、私は生來寫眞といふものでは自分自身の影像は一度も本當に氣に入つたものがない。

もと〳〵相當のお多福なのであるから、別に今さら美くしき年增に撮つたつて有難くもない。別ピンにうつるより、本當に私らしく寫つてくれゝばうれしいのであるが、そんなことはすくなくて時にはヘンに別ピンにとれて嫌らしくて堪らないことさえある。

先年ある大雜誌社にうつかり出掛けたときに、無理に其所の寫眞部でうつしてくれた寫眞は、九條武子さんをひなびさせてにせものにしたような取りすました別ピンさんに撮されてしまつた。先方の大衆大雜誌社では私の神經なんぞはわかりつこは無い

から、大自慢でうんとこさと燒き增しをして贈呈された。

それは見れば見るほど他人のやうに氣どつたいやらしき美人であつた。どうも散々やり場置き場に困つたあげく、燒きすてゝセイセイしたことがある。

これは一つの著るしき惡例であるけれども、どうも私は瞬間に無心で採つたシロウト寫眞や、新聞の寫眞部のセッカチなうつし方には好意をもつけれども、人物寫眞としたのには氣に入つたものは中々出くはさないと一人ぎめして、嫌つているのである。どうも撮す人の性格がうつされるモデルの上にのりうつつて、ちやんと寫眞面に浮び上るのは畫家の場合と同じであるから、その撮す人がせめて自分とウマの合ふ程度でなくては、どうもボウズをした寫眞は否なので、腕のある新聞の寫眞班のとつさのスナップが自他共に天眞で先づあれがいちばん私自身のいろ〳〵なところが見えてすきなのである。

さてそこでモデルにされることは否も應もなくこの遠來の特志の藝術家のために承知はしたが、右の次第を私は卒直に福田さんに話した。

それから私は、このまゝうつすのならいゝが、身仕度をしたり、着物をきかへたりとりすますのは嫌だといつた。然してその私の身なりといふのは、獨得なもので、すぐ客が去れば畫室へととぢ籠つてしまふつもりだから、繪具の付いたブラウスの上へ母親の片身の黑びろうどの片掛の化けたチョッキ、スカアトは茶色のスフのぶくぶく型、そしてねづみの古ちりめん地でこさへた筒袖の和洋せつちうの細えりの羽織を着てゐるのだ。當人はこれが自分のふさはしき家庭着と信じて平然たるものだけれど、常識家が見たら珍かもしれない。

福田さんはつくづくと私を見ながら、例のカバンを開けて、太陽燈だのいろいろの品ものを取り出しながらこんなやうなことをつぶやいてゐる。

『こういふ强敵もたまにはあるからな』

福田さんのモデルは今までにあらゆる方面の女性、無論美しさを持つ方面の人が主であつたのだが、近頃の時世であんまり美しきものばかりでも氣がさして、私なんぞも撮つてみる氣になつたのださうな。

女の撮影に關しては著書もあるのだ、女性の外見、內容に關するウンチクと、その批判及び觀破力は大に談じてみるとお互ひに知りあふ個々人の批評に渡つても共鳴することが多い。こつちにも中々面白き强敵である。

さてそれから、畫室の內外、福田さんの注文のボウズになつたり、私の突作の樣子が氣に入つたり二ダアスばかりうつした。

すつかり濟んでまた座敷へ戻つて、福田さんはやれやれと一服してゐる。私は緣側で勝手に椅子の上へつゞまつて、戶の外を見ほれてゐると、突然福田さんは、一枚またうつした。

このときはもう私は福田さんといふ人の存在をすつかり忘れてひとりの顏をしてゐた筈だ。また福田さんがハッとして撮さうと私を見たその表情は、何ともいへないいゝ顏で、私がかはりに彼をうつして、彼が撮影の醍醐味にひたつた顏はあなたもこんなにいゝ顏なのですよと見せてあげたかつた。

出來上つて示された寫眞はたつた二枚きりであつた。例の最後の一枚はうつす人もうつされる人も無心の瞬間であり、且つ熟練の人が突作につかみ得たよき光りの場面であるから愉しいものである。あとの一枚は陽をあびながら私が何か考へながら語つてゐる大うつしで、顏はキッイが頭腦から何か語るものが流れ出てゐる瞬間なので誠にいゝひたへである。

福田さんはこういつた。

『美醜の點ではこれはワルイですが、一番いゝ寫眞です』

落丁・亂丁等不完全な品は何卒御申出下さい。御取替致します。

昭和十八年一月十五日初版印刷
昭和十八年一月二十日初版發行

三、〇〇〇部

定價 參圓貳拾錢

東亞あちらこちら
出文協承認番號
ア400942號

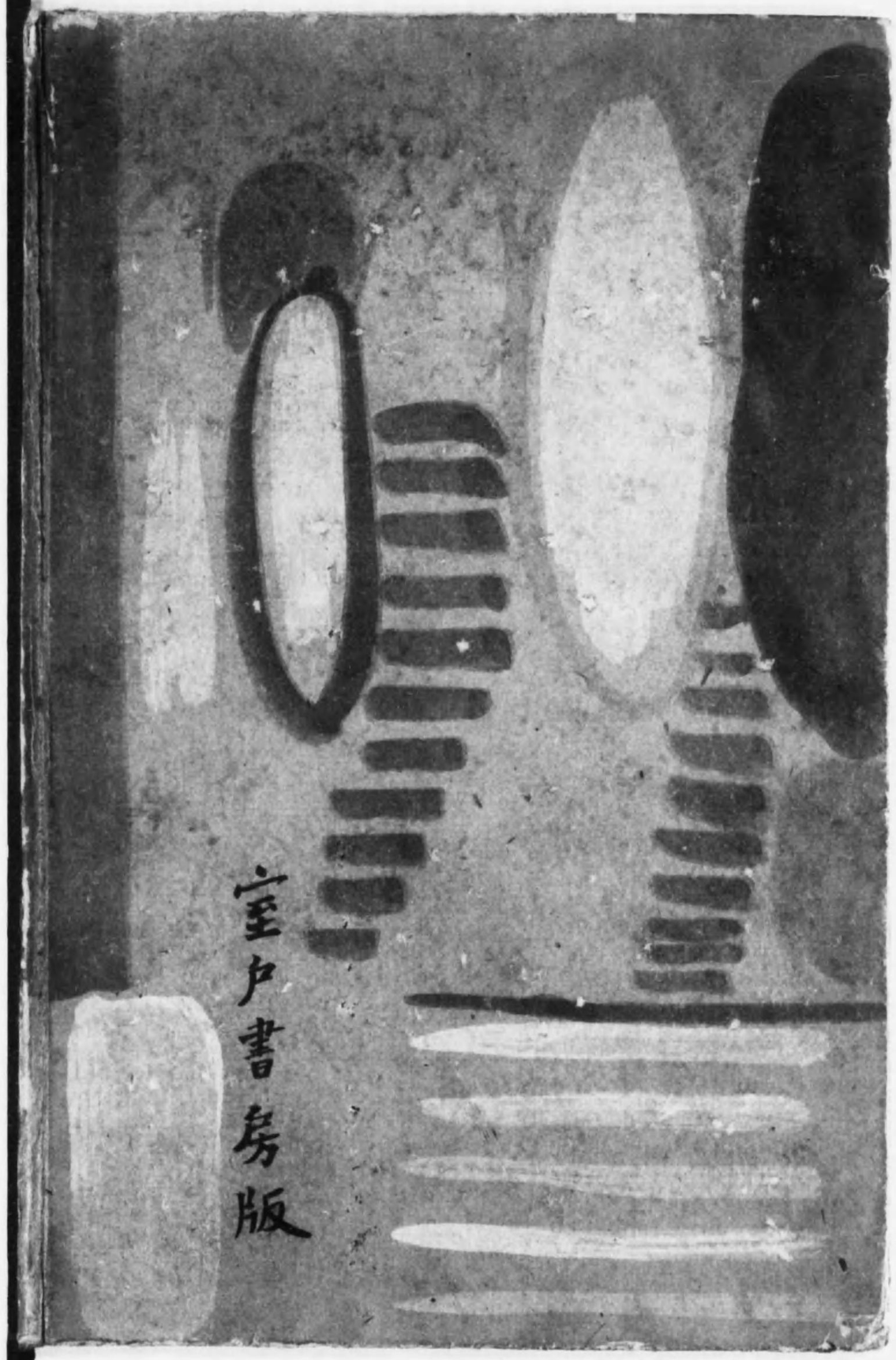
著作者 長谷川春子
東京市神田區神保町三丁目二十九番地
發行者 藤岡孫市
東京市芝區新橋三丁目二十番地
印刷者 櫻井忠三郎
東京市神田區神保町三丁目二十九番地
發行所 室戸書房
電話九段(33)〇一九四番
振替口座東京一一〇六一四番
會員番號一三三〇一五號

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九 日本出版配給株式會社

八紘印刷株式會社印刷

938
112

18年 4月 10日

廣島光洋

終